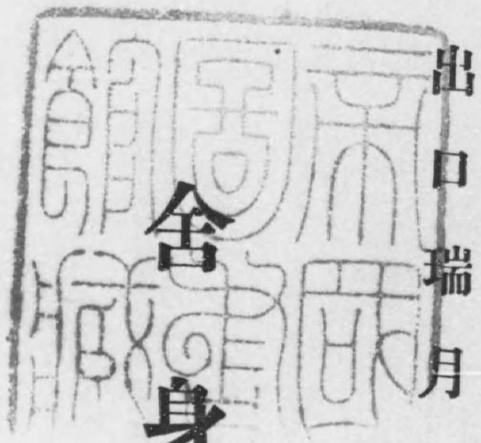
瑞月口述

霊界物語 舍身治躍

申之卷

始

特501
247



出口瑞月口述

舍身活躍

天聲社發行

大正
13. 9. 13
内交

〔靈界物語第四十五巻〕

序文

現時の讀書界は日に月に墮落して卑猥の稗史小説のみ盛んに流行し、健全なる讀物は寥々として曉天の星の如く見る影も無き有樣であります。是心ある人の長大歎息する所であつて人心を害し世を毒すること蓋し測知すべからざるものであります。

迂餘曲折波瀾多き現幽神の三界活歴史の側面はこの靈界物語に依つて眼前に髣髴たるべく、通俗平易の讀物として上乘なりといふも決して瑞月の過言にあらざるを信ずるのであります。

幾多の教訓、規箴、明示、暗示を含み春花、秋月、暖衣、飽食、艱苦の何ものたるかを知らざる人をして興奮發揚せしめて、世道と人心を導き、且又大本に於ける信仰

51,12,16
1094675

淺き信者をしてその嚮ふ所を知らしむるに足ること、信じて止まぬ次第であります。

大正十一年十二月十三日　口述者

舍身活躍（申の巻）目次

序文……頁
總說……一

第一篇　小北の特使

第一章　松風……五
第二章　神木……二六
第三章　大根蕪……四三
第四章　靈の淫念……六七

第二篇　惠の松露

第五章　肱鐵……九九
第六章　啞忿……一一七
第七章　相生の松……一三五
第八章　小蝶……一六四
第九章　賞詞……一八一

第三篇　裏名異審判

第一〇章　棚卸志……一九九
第一一章　仲裁……二二八
第一二章　喜苔歌……二四八
第一三章　五三の月……二六六

第四篇　虎風獸雨

第一四章　三昧經……二七九
第一五章　曲角狸止……二九四
第一六章　雨露月……三一四
第一七章　万公月……三二三
第一八章　王則姫……三三四
第一九章　吹雪……三四五
第二〇章　蛙行列……三五八

舍身活躍【申の巻】〔45〕

口述者　出口瑞月

筆録者　加藤明子
松村眞澄
北村隆光
外山豊二

總說

神靈界には正神界と邪神界との二大區別がある。そして正神界は至善至美至眞なる神人の安住する聖域であり、邪神界は至惡至醜なる鬼畜の住居する、暗黑界である。邪神界は常に正神界の隆盛を羨み、之を破壞し攪亂せんと所在力を竭すものであり、且

又正神界を呪ひ、自らの境遇を忘却して、邪神界に居ながら自ら正神界の神業を立派に奉仕して居るものゝ如く確信してゐるものである。自ら邪神界に墜落せりといふことが悟り得られたなれば、必ず改心する端緒が開けて來るものであるけれども、邪神なるものは其靈性暗愚にして他を顧みるの餘裕なく、世人皆濁れり我のみ獨り澄めり一日も早く此暗黑なる世界を善の光明に照し以て至善至美なる天國を招來せんと焦慮しつゝあるものである。何程海底をして不二山頂たらしめんとして焦慮するとも、到底不可能なるが如く、假令幾百萬年かゝる共海底は不二山頂たることは望まれない。それよりも其海底を一日も早く浮かび出で自ら歩行の勞を積み徐に山頂に登るに如くはないのである。

邪神界にあるものは到底眞の天國を解するの明なく、又神の福音を聞くことは出來ぬ。小北山のウラナイ教の神域に集まつてゐる諸靈や人間の靈身は既に已にその身を根底國に籍を置き邪神の團隊に加入してゐるのであるから、何程言を盡して說示しても駄目である。覺せばさとす程反對に取り何處までも自分が實見したる天の八衢や地獄の外には靈の世界は無いものと考へてゐるものである。本卷の物語を讀んで大本の信者の或る部分の人々は少しく反省されることがあらば瑞月に取つて望外の歡びとするところであります。

大正十一年十二月十三日

口述者

時は今天地ひらく神代かな
神の稜威の鳴り渡る時
世の中の人は忽ち驚かむ
限り知られぬ神の力に

第一篇　小北の特使

第一章　松

野も山も
冬の始めとなり果て、
木々の木の葉は無殘にも
朝な夕なに信徒が
詔る言靈も何となく
曝露なしたる神舘
心の聲が寄り集ひ
天國淨土を來さんと

風（一一九一）

錦に染なす秋の風
凩さそふ村時雨
散りてはかなき小北山
汗をば絞り聲からし
濁りはてたる世の態を
迷ひに迷ふ盲人
あらぬ教に歡喜して
ちがきあせれば曲津見は

時を得顔に跳梁し
蠑螈別の身体を
夜と晝との別ちなく
舌ももつれて言の葉の
心の曲つた魔我彦が
何ぢやかんぢやと機嫌とり
扳かれ乍らも村肝の
迷ひ切つたる眼より
支離滅裂の神敎を
譯の分らぬ迷信者
ウラナイ敎を主管する
曲神の巣くふ宿となし
心をころかすごぶ酒に
あやちもつかぬ御託宣
猊然と側に侍し
眉毛をよまれ尻毛をば
心の魂を研きしと
婆媽共を呼び集ひ
誠しやかに說きたてる
厠に蠅の集ふ如

臭い匂ひをかぎつけて
麝香の樣に喜びつ
醜の魔風を四方八方に
眼の見ぬ文助は
白い裝束白袴
苦勞する墨硯の海に
松の神代の瑞兆と
からみかゝりし黑蛇
只一心に固まりし
切りに首を振り乍ら
沈香ハイコとかしづきて
屁のよな敎理を珍重し
吹き送るこそ忌々しけれ
大門神社の受付に
白目をギロ〳〵剝き出して
心を映す筆の先
千歲の老松に蜿々と
背筋と腹との別なく
一本角の御神体
朝から晩まで書き通し

迷信深き婆媼に
こぼさせ鼻を啜らせつ
拍手うつて叮嚀に
それのみならぬ神様に
甘菜辛菜の墨繪をば
怪しき教にカブラれた
蕪大根のまづい繪を
根から葉つから言霊の
上から下まで脱線の
立つる煙も烏羽玉の
輿へ隨喜の涙をば
掛地や額に仕立上げ
祀らせ居るぞ面白き
御供の代りと言ひ乍ら
はそば〳〵に筆を執り
其証ではなからうが
頭と共に書きつける
ゆかぬ小北の舘には
盲聾の誤神業
墨繪にかいた龍の如

御空を指してくれ〳〵と
見るもいぶせき次第也
アク、タク、テクの三人と
義理一片の暇乞
舘をあとに歸り來る
一本橋の袂まで
遙後の坂の上に
十曜の紋の印したる
オーイ〳〵と聲限り
怪しみ一行は立止まり
宙空に迷ふ人の胸
松彦、萬公、五三公は
ブツ〳〵小言を云ひ乍ら
不平たら〳〵下り坂
河鹿川原にかけ渡す
スタ〳〵來る折もあれ
皺枯聲を張上げて
扇を開いてさし招き
熊谷もぎきに呼とめる
あと振返り眺むれば

橋の袂で出會した
矢を射る如く坂路を
只事ならじと一行は
息を休めて待ちゐたる
御靈幸ひまし〳〵て
八十の曲津や醜司
其實狀を細やかに
述べさせ玉へと瑞月が
御前に畏み願ぎまつる。

お寅婆さんがスタ〳〵と
髪ふり亂し下り來る
橋の袂に腰おろし
あゝ　惟神〳〵
小北の山に蟠まる
眞理を紊し世を汚す
漏れなく落ちなく委曲に
神素盞嗚の大神の

松彥一行は小北山の神館を暇乞をなし、急坂を下りて、一本橋の袂迄歸つて來ると後の方からオイ〳〵と呼とめる者がある。面白くないとは思へ共、何れ、あの勢で走つて來ればぐつかで追ひつかれるに違ない、どんな事をいふか參考の爲、聞いても萬更損にはなるまいと、ここに腰を卸し、簑を布いて暫し待つ事とした。慌だしく走つて來たのは以前のお寅婆さんであつた。お寅婆さんはハー〳〵スー〳〵と息を喘ませ乍ら、

お寅『モシ一寸待つて下さい。お尋ね致したい事もあり、聞いて貰ひたい事もありますから』

松彥『別に私としてはモウあれ丈聞けば澤山でムいますから、聞きたくもありません。又賴まれるべき種もありませんが、餘り偉い勢で、オイ〳〵とお呼になつたもんだから、そ知らぬ顏してゆくのも不人情だと思ひ、こゝで一寸お待ち申して居りま

した』

お寅『誠にお呼止め申して濟みません。實は螺螈別の敎主樣から、折角神樣の御緣で小北山へ參拜して下さつたのだから、お神酒を一杯獻上がしたい。そしてウラナイ敎の敎理を一通り聞いて貰ひたいから、お寅さん、お前御苦勞だが、モ一度此方へ來て下さるやうに願つて來いと、喧しう仰有るので追つかけて參りました。どうぞ來て下さいませ。御迷惑でせうが、決して貴方のお爲に惡いやうなこた申しませんから……』

松彥『折角乍らお神酒は、私は下戸でムいますから、お斷りを申します、又敎理も略見當がついて居りますから、これで御免を蒙りませう』

お寅『そんな事仰有らずに、何卒一足、御苦勞ですが引返して下さいませな。せめて貴方丈なりと御苦勞になれば結構でムいます。貴方は螺螈別の敎主が仰有るには、因緣のあるお方だから、あの方を取逃がしては神政成就が遲くなるから……と仰有りました。貴方のお聞の通り、小北山の山頂に石の宮樣が三社祭つてムいませう。そして右のお宮樣にはユラリ彥命樣、又の御名は末代日の王天の大神樣と申します貴方は松彥樣と云つて、松に因緣のあるお方、其お身魂の生宮樣でムいますからどしてもこしても來て頂かねばなりません』

松彥『貴方は最前、バラモンの軍人が浮木の村を荒すに依つて、ここへ逃げて來たと仰有つたが、樣子を考へて見れば、中々信者所でない、螺螈別さんの大切なお脇立の樣な感じが致しますが、違ひますかな』

お寅『流石は貴方は偉いお方だ、實は私の靈はきつく姫と申しまして、螺螈別樣には大

變な御厄介に預つてゐます。何時も信者だと申して、一本橋の詰へ出張し往來の人樣をウラナイ敎に引張る役を務めて居ります。ウラナイ敎の宣傳使でムいますよ」

松彥『きつく姫か何か存じませんが、隨分キック御活動をなさるのですな』

お寅『ハイ私は靈の因緣性來に依つて御用をせなくちやならんのだと、螢螈別さんが仰有いましたので、母子が一生懸命になつて、御用致して居ります。私の娘も地上姫の生宮でムいます、貴方は末代日の王天の大神樣だから、是非共小北山で御用をして頂かねばなりません』

松彥『ハハハー、わしの樣なガラクタ人間でも、又拾うてくれる神樣があるのかなア』

萬公『モシ〳〵松彥さん、そんな事聞くものぢやありません、サア參りませう。ユラリ彥なんて、馬鹿にしとるぢやありませんか。何ぼ貴方がユラ〳〵してるとて云つても

ユラリ彥では、餘り有難うないぢやありませんか』

お寅『コリヤ萬公、何をツベコベと横槍を入れるのだ。泥棒奴が』

萬公『コリヤ怪しからん、私がいつ泥棒致しましたか』

お寅『イツヒ、、、能うマア白々しい、そんな事を言ふぢやい。お前は娘舍弟の婆舍弟だ』

萬公『舍弟といへば弟の事ぢやないか、弟が何うしたと言ふのだい』

お寅『バカだなア、舍弟といふ事は泥棒といふ事だ、しやべつも〳〵合點の惡い娘泥棒だな』

萬公『アハ、、、、無學文盲にも程がある、こんな先生が螢螈別の一の子分だから、大抵分つたものだい。サア松彥さん、行きませう』

松彦『ウン、そんなら行かうかなア』

お寅『モシ〳〵日の王天の大神様の生宮様、貴方に歸られては、五六七の神政が成就致しません。三千世界を助けると思うて一寸待つて下さいませ』

松彦『何とウラナイ教は巧なものですなア。そんな偉い神様の生宮だと言はれると、ウソだと知り乍ら、つい釣り込まれて、私も何だか惡い氣分がしませんわい。併し乍らそんな事にゴマかされる私ぢやムいません。折角乍ら御免を蒙りませう』

お寅『イエ〳〵何と仰有つても、神が綱をかけたら放さんぞよと仰有るのだから、放しません』

萬公『私をユラリ彦にしてくれたら、喜んで居つてやるんだけどなア、のう五三公、お前は先づタガヤシ大臣の生宮位にしてくれると良いんだけどなア』

お寅『コラ萬、貴様は何處を押へたら、そんな大それた言葉が出るのだ。勿体ないユラリ彦さんなんて、何を言うのだい。お前はブラリ彦だ、ブラリ彦でもまだ勿体ない泥彦位が性に合うてゐる。併し乍ら泥彦でも改心さへすれば蠑螈別様が何とかよい名を下さるだらう』

万公『義理天上日の出神位にして貰へますかな』

お寅『それは改心次第だ、改心の上ではそれ〴〵御名を下さるのだから有難いものだぞ貴様もおれの可愛い娘を仕殺してくれた、餘り可愛うもない、憎うもない男だから茲で一つ改心をしたがよからうぞ』

萬公『改心〳〵つて、人を丸で罪人扱に、ウラナイ教はしてゐるぢやないか、そんな事を聞くとムッとして來て、どんな結構な話か知らんが聞く氣がせんわい。神様の

教を聞いて理解せいと言ふのなら分つてるが、改心と云はれちや餘り面白くない、丸で二十世紀の三五教の宣傳使が言ふやうな事を吐くのだなア。チツとお前の方から改心をして言葉を改めたら何うだ」

お寅「エ、お前達のツベコベ云ふ場合だない、人間が小理窟を云うた所で何になるか、神様が改心せいと仰有れば、ハイ改心致しますと云ひ、慢心せいと仰有れば、ハイ慢心致しますと云つて、一から十迄盲從するのが信仰の要諦だよ。小理窟云ふ間はまだ神の國の門口も覗いてゐない代物の證據だ」

萬公「三年前のお寅さんとは大變な違ですなア、能うマアそれ丈呆けたものだな」

お寅「きまつた事だ、呆けなくて神様の信心が出來るか、呆けて氣違ひになるのが誠の信仰だ。驚でさへも春になると、ホ、呆け狂といふぢやないか」

萬公「オイ五三公、お前代つて一つ談判をやつたら何うだ。かう云へばあゝ云ふ、あゝ云へば斯う云ふ、ヌラリクラリと甘い事團子理窟を捏まはすのだから、流石の俺もウルさくなつて來た、分らんと云つてもこれ位分らぬ教は聞いた事がないワ」

お寅「分らん所に有難味があるのだ。分つて了へば信神する必要がない、分らないから信仰をするのだよ」

萬公「ウフ、、、」

五三「コレお婆アさん、私の靈は分つて居りますかな」

お寅「あゝ分つて居る。お前は青森白木上様の生宮様だ、結構な御靈ぢやなア」

萬公「アハ、、、甘い事仰有るワイ、オイ五三公、嬉し相な顏しとるぢやないか。貴様もソロ〳〵小北山のお寅狐に眉毛をよまれ相だぞ」

五三『どうでも良いぢやないか。言靈の幸はふ國だ。青森白木上になりすまして、一つ羽振を利かしてみやうかい、イッヒ、、、』

お寅『あゝ五三公さんとやら、お前さんは偉いものだ、流石青森白木上さんの肉のお宮丈あつて、會得が早い、萬公のやうな靈の疵物では中々分り憎い。此靈は一遍燒直さねば到底本物にはなりますまい』

五三『お寅さん否大先生樣、私は靈の因緣が分つたとした所で、此三人、、アク、テクタクの靈は分つて居りますか』

お寅『そりや分つて居る共、此アクさんは、、クビ直し彦命、タクさんはヒッタクリ彦命、テクさんは、、テクセ直し彦命樣だ。此肉の宮も小北山にはなくてはならぬ御守護神、早く改心して御用を聞きなされ。夫れ〳〵お宮を建て、祝ひ込めて上げますぞや』

アク『アク迄貴方の命令を遵奉して、神樣の爲に舍身的活動を勵みま……せんわい』

タク『これからタク山な信者を集めて、神樣の御託宣を四方に宣傳し、三五教の爲に盡しますワイ』

テク『テクセ直し彦命がそこら中を、、テクリ廻してウラナイ教の奴を片つ端から言向和し、三五教の爲に活動致しませう。なアお寅さん、それでお前さんは滿足だらう』

お寅『ナニ、お前はそうすると三五教の信者だなア。アブナイ〳〵、よい所でお會ひなさつた。今が改心の仕時ぢやぞね。三五教も結構だが、ウラナイ教は根本の根本の教だから、マア一つ聞いて見なさい。無理に押賣はせんからな』

テク『此婆アさんは、丸で亡者引の樣な奴だなア』

お寅『亡者引の様な奴とは何だい。餘り馬鹿にしなさんな』

テク『滅相な。決して惡く思うて云うたのぢやありません。誠の道に踏ん迷うてゐる亡者を導く八王大神のやうな方だと云つたのですよ。お前さんはチッと耳が惡いので困る。よう云うた事が惡う聞ゐるのだからなア』

お寅『ヤア、惡う聞ゐる事でも直日に見直し聞直すのだから、八王大神様にしておきませう。私も何だか氣分がよくなつた、オッホ、、、時に末代日の王天の大神様の生宮様、ぞうぞ三千世界の人民は云ふに及ばず、鳥類畜類餓鬼虫ケラを助ける爲、螢螈別様の命令を聞いて引返して下さいな』

松彦『そんならお世話になろうかな』

萬公『アハ、、とうとユラリ彦さんになられましたな』

松彦『ウン、ユラリ彦かナブリ彦か、ナブラレ彦か、其時に依つて改名するのだ。オイブラリ彦の萬公さん、お前も一所にブラリ〳〵と引返して見たら何うだ』

萬公『ブラリ彦もお伴致しませう。オイ、青森白木上、アクビ直し彦、クッタク直し彦テクッキ彦、サア行かう』

お寅『流石は萬公だ。否ブラリ彦だ。よい挨拶をしてくれた。それでこそお里の帳消しをしてやる。サア〳〵大廣木正宗様が、義理天上さんと待つてゐられます。サア御苦勞乍ら一足登つて下さい』

松彦『大廣木正宗さんの肉の宮はどなたですか』

お寅『夫は敎祖様の螢螈別様の事ですよ。そして義理天上様の肉宮は魔我彦さんです』

松彦『あゝそうですか、そうするとユラリ彦の方が餘程上の神さんですなア』

お寅『そうです共、そうだから大廣木正宗様が御慕ひ遊ばすのです』

松彦『私がユラリ彦の肉の宮ならば、なぜ大廣木正宗や義理天上が迎へに來んのだらう怪しからん奴だ。そんな禮義を知らぬ正宗や義理天上なら、モウ行く事はやめておかう。サア、萬公、五三公、アク、テク、タク、行かう』

お寅『モシ〳〵末代日の王天の大神様暫くお待ち下さいませ。尊き御身を持ち乍ら、世界の爲に御苦勞遊ばし、同情の涙にたへません。これも時世時節でムいます。二三日御逗留下さいましたならばキッと正宗さんも天上さんも貴方に厚くお仕へなさるでせう』

松彦『そうすると、私が教主になるのかなア』

お寅『そこは正宗さんと御相談の結果如何なりますやら、そこ迄申上げるこた、此婆アには權能がありませんからな。何は兎もあれ引ずつてでも歸らねばおきません。見込まれたが因縁だと思うて、貴方も男らしう決心なされませ』

松彦『あゝ大變な迷惑だなア。仕方がない。そんなら行かうか』

萬公『ハッハ、、、こうと捕虜になつて了つた。ホリヨ〳〵と涙が溢れるワイ、ウフ、、可笑し涙がイヒ、、』

一同『フッフ、、ブーックワッハ、、』

（大正一一、一二、一一、舊一〇、二三、松村眞澄錄）

第二章　神

木（一一九二）

お寅婆アさんは松彦に向ひ河鹿川の川岸に枝振りのよい老松が蜒々として枝を四方に廣げ川の上にヌッと突き出て居るのを指し、

お寅『もし、末代日の王天の大神の生宮様、あの松を御覽なさいませ。立派なもんぢやムりませんか』

松彦『成る程、川の景色と云ひ、あの枝振りと云ひ青々とした艶と云ひ、實に云ひ分のない眺めですな。隨分鶴が巣籠りをするでせうな』

お寅『ハイ〳〵、鶴どころか、あの松には日の大神様、月の大神様を初め八百萬の大神様がお休み遊ばす世界一の生松でムります。末代日の王天の大神様の、あれが御神体でムります』

松彦『さうすると、あの松は私の御霊の變化ではあるまいかな』

お寅『滅相な、變化どころか、あれが貴方の本守護神ですよ。時節と云ふものは恐いものですな。さう〳〵生神様の貴方様がお越しなさる様になつたのだから、ウラナイ教は朝日の豎榮昇り彦命になります。螺螈別の教祖が仰有つた事は一分一厘違ひませんがな』

萬公『アハ、、、松彦さん、貴方は不自由な體ですな、いつもあの川邊に水鏡ばつかり見て鳶鷹等に頭から糞を引つかけられ泰然自若として川端柳を氣取つてムるのですな。道理で足が重いと思ふて居た。本守護神があの松の大木だと分つての上は松彦さんの無精なのも、あながち責る譯にも行きますまい。エヘ、、、』

お寅『これ〳〵ブラリ彦、又口八釜しい。左兵衛治をするものぢやない』

萬公『これ婆さん、わしは左兵衛治なんて、そんな老爺めいた名じやありませんぞ。萬古末代生通しと云ふ生々した萬公さんだ。餘り見損ひをして貰ひますまいかい』

お寅『オホ、、、何と頭の惡い男だな。左兵衛治と云つたら差出物と云ふ事だ。何でもかんでもよく差出て邪魔ばつかり致すから、左兵衛治と云つたのだよ。大松のお前が差出る處じやない、芋堀奴めが』

萬公『おりや、あんな大松とはチッと違ふんだ。なんぼ大松だつて松の壽命は千年だ。此方は萬年の壽命を保つ萬公さんだ。あんまり安う買ふて貰ひますまいかい』

お寅『エーエ、何から何まで敎育してやらねば譯の分らぬ困つた男だな。大松と云ふ事は大喰人足と云ふ事の代名詞だ。野良へやれば蕪をぬいて食ふ、大根をかじる、人参を喰ふ、蕗摩芋から南瓜の生まで、嚙じる喰ひぬけだから、それで大松と云ふのだ』

萬公『大喰ひするものを大松と云ふのは可笑しいじやないか。其言葉の起源を說明して貰ひたいものだな』

お寅『エーエ、合點の惡い代物だ、ライオン川の杭は、みんな長い大きな奴が要るのでそれで大杭の長杭と云ふのだ。その大杭の長杭は大松じやなければ出來んのだから大松と云つたのだよ』

萬公は妙な手付をして

萬公『ア、そうでおまつか、ヘーン、松彦さんもさうすると松に因緣があるから大松でせうね』

お寅『お前の松は杭になつた松だ。此お方の松は、あの通り生々した生命のある松だよ萬古末代生通しの松と、幹を切られ枝を拂はれ年が年中頭を削られて逆トンボリにされ尻を叩かれて、突つ込まれて居る大松とは、松が違ふのだ。善惡混淆して貰ふては大變困りますわい。然し松彦さん、あの松の木の根元に結構な御守護がしてあるのだから大門神社に行く迄に一寸そこの神樣に參拜して貰ひたいのです』

松彦『あの松の根元に神樣が祀つてあるのですかな』

お寅『ハイ〳〵、あそこが肝腎な御仕組場だ。あの因緣が分らねば小北山の因緣が分りません。是非共來て貰ひ度いものです』

萬公『さうすると、まだ外に神さんが祀つてあるのか。一遍に見せると食滯すると受付の爺さんが云ふた神さんだな。一つ見るも二つ見るも同じ事だ。序に觀覽して來ようかな。おい、五三公、アク、タク、テク、何うだ、貴樣も一つ見物する氣はないか』

一同『ウン、面白からうな。參考の爲にお寅さんの、亡者案内で見物して來ようかい。お寅さん、亡者案内賃は安うして置いてくれや、見掛ぢりをやられると此頃我々はチッとばかり手許不如意なのだから困りますぞに』

お寅『觀覽だの、見物だのと、何と云ふ勿体ない事を仰有るのだ。見に行くのだない。參拜に行くのだ。何故參拜さして頂きますと云はんのだ』

萬公『三杯ぢころか、もう之丈け澤山に誤託宣を聞かして頂いた上は腹一杯胸一杯だ、アハ、、、』

お寅『サア、末代樣、御案内致しませう。何卒此婆について來て下さいませ』

松彦はいや〳〵乍ら婆アの後に一行と共に枝振りのよい大松の籠まで進んで行つた見れば途方途徹もない大きな岩が玉垣を圍らし切口の石を疊んで置物の樣にチョンと高い處に立派に祀つてある。さうして傍に案内石が立ち蠑螈別の筆跡で

さかゐの神政松の御神木

と記してある。

五三『もしお婆さん、此大きな岩は一体何だい。さうして御神木と記してあるが、こりや木じやない、岩じやないか』

お寅『そんな事は氣にかけいでも、理窟いはいでも、いゝじやないか。お前達が神木する樣に「さかゐの神政松の御神木」と書いてあるのだよ。こゝは善と惡との境だから小北山の地の高天原へ惡神の這入つて來ん樣に千引岩が斯うして置いてあるのだ表向きは彌勒樣の御神体だと云つて居るのだ。さうして十六柱の神樣がお祀りしてある標だと云つて十六本の小松が此通り植ゑてあるのだ。然し乍ら之は表向き、實の處は素盞嗚尊の生魂をこゝへ封じ込んで動きのとれん樣に周圍八方石疊を圍らし、上から千引の岩を載せて、萬古末代上れぬ樣に封じ込めておいたのだ。そのために瑞の魂の素盞嗚尊は八方塞がり同樣で、二ッ進も三ッ進もならぬ樣になり困つてゐやがるのだ。此石をこゝへ運ぶ時にも隨分苦勞をしたのだよ。第一蠑螈別さん、魔我彦さん、大將軍さん、此お寅等の奮勵努力と云つたら大したものだつた。夜も晝も二十日ばかり寢ずに活動して到頭素盞嗚尊の惡神を封じ込めてやつたのだ。三五教の奴は何にも知らずに馬鹿だからヤッパリ素盞嗚尊が此世に現はれて居る樣に思ふてゐるのだよ。斯うしておけば三五教の信者を鼠が餅ひく樣に皆小北

山に引張込むと云ふ蠑螈別様の御神策だ。何と偉いものだらうがな」

萬公五三公の兩人はクワッと腹を立て兩方から婆の手をグッとひん握り、

萬公「こりや糞婆、もう量見ならねゝ。此川へ水葬してやるから、さう思へ。怪しからん事を吐す」

五三「こりや、お寅、蛙は口から、我と我手に白狀致した上からは、もはや量見ならんぞ。サア覺悟せい。おい萬公、其方の足をとれ、俺も此足を持つて川の深淵へ擔いで行つて放り込んでやるのだ」

お寅「オホ、、、、地から生にた木の樣なものだ。此婆がお前達三人や五人に動かされる樣なヘドロい婆か。龍宮の乙姫さんの御神力を頂いた上に艮金神樣の分け魂のお憑り遊ばした丑の年生れの寅さんだ。丑寅婆アさんを何と心得てるのだ」

萬公「おい、五三公、隨分重い婆だな。本當にビクともしやがらんわ」

アク「アハ、、、、ビクともせん筈だよ。婆アさんは其處に居るじやないか。お前達は岩を一生懸命動かそうとしたつて動くもんかい。それが婆アさんに見ねたのか」

五三「いや、ほんに〳〵岩だつたな。おけ〳〵馬鹿らしい。お寅婆は彼處にけつかるじやないか」

お寅「オホ、、、三五教の信者の眼力は偉いものだな。お寅さんとお岩さんと取違へするんだから」

萬公「エー」

アク、タク、テク三人「アハ、、、、又いかれやがつたな」

お寅「あんまり疑ふて居ると眞逆の時に眩惑がくるぞよ、足許の深溜が目に見ねん樣

になるぞよ。ウフ、、、』

松彦『お婆さん、いや如何も感心致しました。これから一つ大門神社へ參りませう』

お寅『あ、お前さんは末代様だ。身靈が綺麗だと見える。あんなガラクタは後廻しで宜しい。お寅さんの後から跟いて來なさい。龍宮の乙姫さんが末代さんを御案内致しませう』

松彦『ありがとう。然し乍ら此連中を捨てゝ置く譯にも行かんから連れて行かう』

お寅『それは貴方、末代さんの御都合にして下さい。サア斯うおいで成さいませや』

と頭をペコ〳〵させ頻りに媚を呈し乍ら、もと來し道に引返し急阪を一行の先に立つて上り行く。

急阪を二三丁ばかり登つた處にロハ臺が並んでゐる。

萬公『もし松彦さん、一寸こゝで休息して行きませうか』

松彦『ウン、よからう』

と腰をかけ息を休める。お寅は怪嫌な顔をし乍ら後ふり返り、

お寅『逆理窟ばかり囀る萬公が
　阪の中央で屁古垂れにけり。
偉相に腮をたゝいて居た萬公
　此弱り樣は何の事だい。
鼈に蓼食はした樣な息づかひ
　萬々公も休むがよからう』

萬公『迷信の淵に沈んだお寅さん

底知れぬ淵へバサンとはまつて。
之程にきつい阪をばスタ〳〵と
登るは狐狸なるらん。
登り阪上手な奴は馬兎
丑寅婆さんの十八番なるらん』

お寅『糞垂れて婆さんの登る山道を
屁古垂れよつた萬公の尻。
芋蕪大根人參あつたなら
萬の野郎に喰はせ度きもの。
大根や蕪がきれて息つまり

何と茄子の溝漬け男』

萬公『臭い奴、我一行の先に立つ
腋臭とべらの婆の尻糞』

お寅『こりや萬公、臭い奴とは何を云ふ
貴様は臭い穴探しぞや。
彼岸過ぎになつても穴の無い蛇は
そこら邊りをのたくり廻る。
穴ばかり探して歩く萬公を
岩窟の穴へ入れてやり度い』

萬公『何吐す丑寅婆の尻糞奴

尻が呆れて雪隱踊らん」

松彦『ロハ臺に腰打ち掛て萬公が
尻のつぼめの合はぬ事言ふ』

五三公『ロハ臺に尻を卸した萬公さん
糞落ちつきのないも道理よ』

アク『アク〳〵と互に誹り妬み合ひ
無性矢鱈に口をアクかな』

タク『いろ〳〵とタクみし証據は千引岩
松の根元に澤山にある』

テク『山阪をテクる我身は何となく
足腰だるくなりにけるかな。
面白もない婆さんに導かれ
登るも辛し針の山阪』

お寅『萬公よアク、テク、タクの御一同
此阪道は神の坂だよ。
神になり鬼になるのも此坂を
越ねん事には分るまいぞや』

アク『登りつめアクになつたら何とせう
丑寅婆さんに欺かれつゝ』

お寅『疑を晴らして龍宮の乙姫が

後に來る身は大丈夫だよ』

松彦『サア一同、もう行つてもよからう。乙姫さん、宜しう賴みます』

お寅『ホ、、、、末代樣、サア參りませう』

萬公『ヘン、馬鹿にして居やがる。婆の乙姫さんも見初めだ。なア五三公』

五三『きまつた事だ。逆樣の世の中だもの、乙姫さんだつて世界のために御心配遊ばしてゐるのだもの、チッとあ年も寄らうかい。アハ、、、』

一同『ウフ、、、』

（大正一一、一二、一一、舊一〇、二三、北村隆光錄）

第三章　大根　蕪（一一九三）

艮婆さんに誘はれて
萬公五三公其外の
心ならずも登りゆく
千引の岩に包まれし
油斷ならじと村肝の
さあらぬ体を裝ひつ
刻んで上る門の前
これ〳〵申し受付の

末代さんの松彦は
三人と共に急阪を
川邊の松の根本なる
秘密の鍵を握りつゝ
心を固め腹を据ゑ
細い階段スタ〳〵と
お寅婆さんは立ち止まり
文助さんよ末代の

神の生宮初めとし
いよ〳〵此處へお出ましだ
蠑螈別の敎祖さんに
神の惠も大廣木
日の出神の生宮も
龍宮海の乙姫が
艮婆さんの挨拶で
グズ〳〵してると歸られちや
早く〳〵と小聲にて
文助爺さんは頭をば

五人のガラクタ神さんが
一時も早く奥へいて
早く取次なされませ
正宗さんや義理天上
嘸や滿足なされましよ
懸りたまふた肉の宮
こゝまで喰へて來た程に
又もや元の杢阿彌だ
耳に口寄せ囁けば
縱に三つ四つ振りながら

川の流れを遡る
襖押開け奥の間へ
暫くあつて魔我彦は
氣もいそ〳〵といで迎へ
天の大神生宮だ
正宗さんが奥の間で
ボートワインの瓶並べ
遠慮は決して入りません
かうなる上はお互に
腹を合して神業に

やうな足つきトボ〳〵と
白き姿をかくしける
滿面笑を湛へつゝ
貴方は末代日の王の
能くまアお出下さつた
山野河海の珍肴に
にこ〳〵顔で待ちたまふ
貴方は神の生宮だ
敵と味方の隔てなく
力の限り盡しませう

小さき隔てを拵へて　　ゴテ〳〵爭ふ時でない
神政成就の御時節が　　いよ〳〵切迫した上は
末代樣の肉の宮　　どうしてもかうしても此山に
居つて貰はにやなりません　　神素盞嗚の惡神が
立てた教に沈溺し　　下らぬ熱を吹き乍ら
廣い世界を遠近と　　宣傳して居る馬鹿者が
澤山あると聞きました　　承はれば貴方樣
三五教にお入りと　　聞いて一寸は驚いた
さはさり乍ら能く聞けば　　河鹿峠で兄樣に
廻り會ふたが嬉しさに　　ほんの當座の出來心

三五教に御入信　　なさつた事が知れた故
いよ〳〵こいつは脈がある　　こんな結構な肉宮を
ムザ〳〵歸してはならないと　　正宗さんの肉宮が
焦れ遊ばしお寅さんを　　もつて態々貴方をば
引き留めなさつた御無禮を　　よきに見直し聞直し
宜り直しませ魔我彦が　　蠑螈別の代理とし
茲に挨拶仕る　　サア〳〵早う遠虜なく
奥へ通つて下しやんせ　　神政成就の糸口が
開けて來る小北山　　これ程目出度い事あらうか
あゝ惟神〳〵々々　　神の御前に願ぎ奉る。

松彦　『朝日は照るとも曇るとも
萬公　『惡魔は如何に叫ぶとも
松彦　『月は盈つとも虧くるとも
萬公　『つまらぬ教を聞くとても
松彦　『たとへ大地は沈むとも
萬公　『足らはぬ我等の魂で
松彦　『誠の力は世を救ふ
萬公　『誠の事は分らない
松彦　『此世を造りし神直日
萬公　『此世の罪を神直日

松彦　『心も廣き大直日
萬公　『困つた事と知り乍ら
松彦　『唯何事も人の世は
萬公　『唯何となく調べんと
松彦　『直日に見直し聞直し
萬公　『何は兎もあれ上り來て
松彦　『身の過は宣直す
萬公　『皆山阪を乘り越にて
松彦　『三五教の宣傳使
萬公　『危ない教を宣傳し

松彦『治國別の後追ふて
萬公『蠑螈の別に招かれて
松彦『漸く此處に上り來ぬ
萬公『如何なる事か知らねども
松彦『末代日の王天の神
萬公『なぞと云はれて松彦は
松彦『怪しき雲に覆はれつ
萬公『樣子探らんものをとて
松彦『忙しき身をば顧みず
萬公『お寅婆さんの後につき

松彦『來りて見れば文助が
萬公『置物然と坐り居る
松彦『お寅婆さんは聲をかけ
萬公『敎主の宮に逸早く
松彦『報告なされと急き立てる
萬公『合點往かんと待つうちに
松彦『やつて來たのはお前さん
萬公『義理天上の肉宮と
松彦『名乘るお前は魔我彦か
萬公『道理で腰が曲つてる

松彦『丑寅婆さんの云ふたよに
萬公『この松彦が天の神
松彦『一番偉い身魂なら
萬公『蠑螈の別は逸早く
松彦『迎ひに來なくちやならうまい
萬公『何か秘密が此家に
松彦『潜んで居るに違ひない
萬公『これや浮かゝと奥の間に
松彦『進む譯には行きません
萬公『誠の心があるならば

松彦『肝腎要の教祖さん
萬公『蠑螈別が我前に
松彦『お越しになつて御挨拶
萬公『叮嚀になさらにやならうまい
松彦『これが第一不思議ぞや
萬公『魔我彦さんよ今一度
松彦『奥の一間に驅け入つて
萬公『確な返答を聞いた上
松彦『又改めて御挨拶
萬公『得心するよに云ふて呉れ

松彦『さうでなければ何處迄も
萬公『面會する事お斷り
松彦『これからぼつ〳〵歸ります
萬公『これ〳〵丑寅お婆さん
松彦『いかいお世話になりました
萬公『いざ〳〵さらばいざさらば』
お寅婆は兩手を擴げて
お寅『これ〳〵申し肉の宮
氣が短いも程がある
大に迷惑致します
末代日の王天の神
惡氣を廻して貰つては
正宗さんの肉宮は

貴方を決して袖にせぬ
飛びつきたいよに心では
さはさり乍ら入百萬
お神酒を飲つてムる故
短氣を出さずに氣を靜め
貴方の顏を潰すよな
これ〳〵日の出の義理天上
一時も早く奥へいて
お前の智慧のありたけを
螺螈別の神樣に

一時も早く現はれて
思ふてムるは知れた事
尊き神が出入して
どしてもこしても暇が無い
暫く待つて下しやんせ
下手なる事はさせません
何をグズ〳〵してムる
何とか彼とかそこはそれ
縱横無盡に振り廻し
〇〇〇〇してお出で

それが出來んよな事ならば　義理天上も怪しいぞ
日の出の神も駄目ぢやぞに」

魔我彦『お寅婆さんの云ふ通り
羽織の紐ぢやないけれど　これから奥へ踏ん込んで
一伍一什を打ち明けて　私の胸にちやんとある
末代日の王天の神　蝶蝶別に申しませう
失禮します』と云ひながら　暫く待つて下しやんせ
一間をさして入りにける。

○

待つ間久しき鶴の首　萬公さんは氣を焦ち
脱線だらけの言霊を　無性矢鱈に打ち出す。

萬公『松彦さんよ五三公よ　アク、テク、タクの三人よ
蝶蝶別と云ふ奴は　尊き俺等の一行を
本當に馬鹿にするぢやないか　木枯し強い寒空に
火の氣一つなき受付に　待たして置いてグズ〳〵と
神のお給仕か知らねども　鱈腹酒に喰ひ酔ひ
ズブロクさんになりよつて　無我と夢中の爲體
夜中の夢を安々と　見て居やがるに違ひない
これ〳〵申し松彦さん　私は腹が立つて來た
松の根下の岩と云ひ　艮婆さんの云ひ草が
どうしたものか腑に落ちぬ　こんな所へ迷ひ込み

眉毛をよまれ尻の毛を　一つも無いよに拔かれては
世間へ對して耻晒　治國別の先生に
ごうして云ひ譯立つものか　俺をば失敬な婆の奴
ブラリ彦だと云ひ居つた　松彦さんはユラリ彦
國治立の神さんの　お脇立だと崇め置き
口の先にてチョロまかし　謀叛を起すつもりだらう
挺にも棒にも合はぬ奴　したゝかものが此の山に
潜んで居るに違ひない　聖人君子は危きに
近づかないと云ふ事だ　貴方は知つて居る筈ぢや
サア〳〵松彦歸りませう　こんな處で馬鹿にされ

ごうして男が立つものか　アク、テク、タクよ五三公よ
お前は何と思ふて居る　意見があれば今こゝで
遠慮は入らぬ薩張と　俺にぶちあけて吳れんかい
腹の虫奴がグウ〳〵と　怒つて〳〵仕樣が無い」
五三公「五三公さんが思ふ事　遠慮會釋もなきまゝに
陳列すれば左の通り　耳を浚へて聞くがよい
小北の山の神さんは　常世の姫の憑りたる
高姫黑姫兩人が　迷ひの雲に包まれて
開いて置いた醜道だ　肝腎要の高姫や
黑姫さんが改悟して　三五教に降伏し

今は立派な神司　見向きもやらぬウラナイの
教を信じて何になる　肝腎要の教祖さん
高姫さんや黒姫が　自ら愛想を盡かしたる
ウラナイ教に信實が　ありそな事は無いぢやないか
これだけ聞いても分るだらう　思へば研究の價値はない
これ〳〵申し松彦さん　私はもはや嫌になつた
深くはまらん其中に　こゝをば立ち去りスタ〳〵と
惡魔の征途に上りませう　取るにも足らぬ奴原を
相手に致して暇潰し　肝腎要の神業に
後れた時は何とせう　磯の舘の神樣に
云ひ譯立たぬ事になる　萬公、アク、タク、テクさんよ
お前等は何と思ふてるか　一應意見を五三公に
聞かして呉れよ賴むぞや」
アク「天地の神の御名を笠にきて
世を亂しゆく曲ぞ忌々しき。
義理天上日の出の神と魔我彦が
何を目あてに云ふぞおかしき。
松彦を末代樣よ日の王よ
天の神ぢやと旨く釣りやがる。
善く云はれ氣持の惡う無いものと

松彦さんが迷ひかけたる』

松彦『今暫し我なすまゝに任しおけ

善しと悪しとは神がさばかん』

タク『澤山に怪体な宮を建て並べ

怪体な託宣するぞおかしき。

タクは今思ひ浮かぶる事はなし

此場を早くぬけたいばかりぞ』

テク『テク〳〵と強い山をば登らされ

きつい狐につまゝれてける。

きつい姫名から狐の守護神

義理も天上もあつたものかい』

文助『最前から默言つて此處で聞いて居れば、お前さん達は大變にこのウラナイ教の本山を疑ひ、ゴテ〳〵と小言を仰有るやうだが、そんな事を仰有ると神罰が當りますぞや。唯何事も神樣にお任せなされ、自分の着物の襟裏についた虱さへ捻り盡されない身で居ながら、廣大無邊の御神力を彼是云ふといふ事がありますか。障子一枚外は見ぬと云ふ人間の分際で居ながら、大廣木正宗樣のお樹てなされた教を何ゴテ〳〵と云ひなさる、ちと嗜なされたら好からう、ほんに憐れな人達だなア』

萬公『芋燕大根蛇松を書く

文助さんにかきまはされにけり。

芋南瓜茄子のやうな面をして

燕　大根書くぞおかしき。

文助が屁理窟計り並べ立て

ぱゝ垂れ腰で睨みけるかな」

文助『これ〳〵若い衆、燕、大根描いたとて蛇を描いたとて大きにお世話樣だ。放つといて下され、お前達のやうな糸瓜のかすに分つたもんかい。瓢簞から駒が出る、徳利から酒が出る。早く改心をなさらんと、往きも戻りもなりぬやうな大根ないが迫つて來ますぞや。嘘計りツグネ芋して、山の芋ばかりして居るのだらう。本當に、芋もよい芋助だなア。屁のつゝぱりにもならんやうな小理窟計り囀つて、何の事だいな」

萬公『お爺さん、誠に失禮な事を申ました」

文助『失禮だと云ふ事が分つたかな、分ればよい、神樣は何でも見直し聞直し宣直し遊ばすのだから、これからは心得なされよ、我が目が見ねぬと思ふて馬鹿にして居なさるが、目の見ねぬ目あきもあり、目の見ねる盲もある世の中だから、餘り左兵衛治をなさると、取り返しのならぬ事が出來ますぞね」

萬公『こんな魔窟へやつて來て、身魂を曇らされては取り返しがつきませんわい。ウフ、、、」

文助『エ、仕方が無い男だ。こんな分沒曉漢に相手になつて居つたら龍神さんが一枚も描けぬやうになつてしまふ。お蛸さんに賴まれた燕がもちつと仕上らんから、ぢれ奥へ往つて靜かな所で一筆揮つて來ませう、これ〳〵末代日の王天の大神樣、暫く待つて居て下さいませ。これから教祖樣へ御催促して來ますから」

萬公『蕪の先生、左樣なら』

文助『エ、仕方が無いわい、仕方の無いケレマタだなア』

と呟きながら奥の間へ姿を隠した。

（大正一一、一二、一一、舊・〇、二三、加藤明子錄）

第四章　靈の淫念（一一九四）

朝から晩まで酒盛の
數多の神の出入に
頬べた迄も赤くして
侍者の鼻をばゆがませつ
あたりの空氣を改惡し
呂律もまはらぬ舌の根に
ウラナイ敎の神言を
唱へて又もや神樣に

蠑螈別の神司
酒を祀ると云ひ乍ら
臭い息をば吹まくり
腋臭のかほり紛々と
天津祝詞の言靈を
ころばせ乍ら朝の中
汗をタラ〳〵絞りつゝ
うましき酒を獻り

づい六さんになつた上
足許怪しく進みより
御國を來らせ玉へかし
地にも天國建てさせよ
ウドンに蒿麥に燒芋の
曲津の神の御光來
絶對的に博愛の
夕べになれば正宗の
蝶螈別は珠數をもみ
般若心經波羅密經

眞晝が來れば神前に
天にまします吾父よ
天になります其如く
アーメン、ソーメン、トコロテン
肴をドッサリ前に据ゑ
いと叮嚀に歡迎し
趣旨を貫徹させ乍ら
酒にはあらぬ肉の宮
南無阿彌陀佛南無阿彌陀
節面白く稱へ上げ

三教合同の御本尊
天晴れ教主と成りすまし
張上げ唸るお寅さん
爛德 利をひん握り
前につき出し目を細うし
正宗さんよコレちよいと
酒のタンクの正宗は
お寅よお前は偉い奴
まだどこやらに花の香が
お前の優しい其目許

○○さんの後をつぎ
酒の機嫌でドラ聲を
小皺のよつた手を出して
朝顔型の盃を
お酒の功德も大廣木
お過ごしあれと差出せば
御機嫌斜ならずして
年はとつても姥櫻
ブン〳〵殘つて居るやうだ
オット、、、、、こぼれます

あんまり勢が強い故
一張羅のお小袖が
さは去り乍ら之も亦
よごされたりと見直せば
可愛いお方が好き好む
如何して不足に思ひませう
又もや前に突出せば
あゝ世の中に酒と云ふ
お酒が俺の生命だ
ナイスも嬶も要るものか
情が餘つて迸り
サッパリわやになりました
正宗さんの御酒に
却て私は有難い
靈のこもつた露ぢやもの
一献あがれと德利を
正宗さんは悦に入り
奴程可愛いものはない
酒さへあらば如何樣な
お寅のさした盃は

高姫さんの口元に
此盃を唇に
何ともいへぬ味がする
これ高姫よ〳〵
こゝに居ますと一言の
口ばつかりがあつたとて
お目にかゝらな氣がゆかぬ
夢の浮世といふことは
夢の蠑螈別さんと
コレ〳〵丑寅婆アさんよ
ぞことはなしによく似とる
あてゝキッスをする時は
あゝ有難い〳〵
大けな口を開け乍ら
なぜ言問ひをしてくれぬ
肝腎要の肉の宮
ホンに思へば情ない
こんなことをば言ふのだろ
播陽さんが言ひよつた
お前ぢや根つから氣がゆかぬ

大奥に居る上義姫　肉の宮をば呼んで來て
酒の相手をさしてくれ　何とはなしに淋しうて
そこらが治たくなつて來た　そも人間といふ奴は
異性がなくては面白く　可笑しう此世が渡れない
サア〳〵早う上義姫　呼んでお出でとダダこねる
丑寅婆さんはキッとなり　口角泡をとばしつゝ
團栗眼をむきいだし　蠑螈別の旦那さん
私の前でそんな事　どこを押へたら言へますか
過ぎし逢瀬の睦言を　最早お忘れなさつたか
ホンに薄情なお前さん　私は今は年老つて
皺苦茶婆アになつたれど　浮木の村の俠客で
丑寅さんと仇名をば　取つたる女俠客だ
バカになさるも程がある　何程神が澤山に
お出入りなさるか知らね共　さうクレ〳〵と猫の目の
お變り易い繼衣　破つて貰つちやたまらない
私も了見ある程に　覺ねてゐろよと言ひ乍ら
松彦さんを受付に　待たしたことを打忘れ
蠑螈別の胸倉を　力に任せてグッと取り
コリヤ〳〵正宗大廣木　蠑螈別よバカにすな
お寅の腕には骨がある　モウ此儘ですまさんぞ

どうぢや〳〵と胸板を
力に任してもみつぶす
螺螺別は泡を吹き
顔を眞青にサッと變へ
アイタタタッタ待つてくれ
どうやら息が切れさうだ
もう是からはスッパリと
松姫さんの上義姫
肉の宮をば思ひ切り
お前を大事にする程に
放せよ放せ胸倉を
アイタタタッタウン〳〵〳〵
苦しいわいの、コリヤお寅
許してくれよと手を合はし
剛情我慢の正宗も
命惜さに詫入れば
呆れてこける爛德利
盃までがメチヤ〳〵に
碎けて笑ふ面白さ
ガチヤン〳〵と拍子取り

土瓶は躍る德利舞ふ
朝顔型の盃は
落花微塵となりはて、
姿小さく數多く
變化したるぞ可笑しけれ
お寅は尙も承知せず
コリヤ〳〵正宗大廣木
口先ばかりでツベコベと
ゴマかしよるか、そんな事
聞くよな婆ぢやない程に
以後のみせしめ今一つ
あの世この世の境まで
やつてやらねばおかないと
鬼の蕨をふり立て、
悋氣の勢凄じく
ボカン〳〵と打たゝく
目を白黑とさせ乍ら
アイタタタッタコリヤ許せ
金輪奈落天が地と
なる世が來ても正宗は

決してお前を捨てはせぬ
早く放してくれぬかい
早遠國へ出奔し
冬の薄衣ブル〳〵と
あゝ惟神　々々
涙と共に手を合せ
今日はゆるしても許しやせぬ
怪体な細目をむきやがつて
今日はドッサリ身のあぶら
たかが男の一人位

疑はらして其手をば
折角呑んだ酒迄が
ゾッと身に泌む秋の風
身体一面慄ひ出した
御霊幸ひましませよ
願へばお寅はつけ上り
松姫さんに涎くり
私を盲目にしたぢやないか
絞つてやらねば虫がいねぬ
殺した所で何惜い

観念せよと言ひ乍ら
何時果つべしとも見ねざりし
魔我彦さんの義理天上
見るより忽ち仰天し
ついたる様の可笑しさよ
コリヤ〳〵お寅婆アさんよ
なぜ其様に失禮な
痩てもこけてもウラナイの
神の出入の生宮を
覿面に罰が當るぞや

怒りの面色凄じく
所へスタ〳〵やつて來る
日の出神の肉宮が
アッとばかりに尻餅を
魔我彦漸く口をあけ
正宗さんの肉宮を
無体なことを致すのか
神の教の教祖様
打擲するとは何の事
早く其手を放しやんせ

言へばお寅は目をすゑて
譯も知らずにッペコベと
唐變木のお前さんに
モウ斯くなれば何もかも
實の所は此お寅
夜は嵯き敷蒲團
人もあらうに神樣の
秋波を送り二世三世
約束したる此わしを
お寅の顏が立たないと

コリヤ〳〵魔我彦義理天上
仲裁だてが氣にくはぬ
此いきさつが分らうか
一切曝露して了ふ
正宗さんに思はれて
恩も知らずに此色魔
御用を遊ばす松姫に
百生迄も夫婦ぞと
邪魔者扱にさらす故
今折檻をするとこぢや

子供の出て來る幕でない
どこへかゝるか知れないぞ
どこなと勝手に逃げなされ
腹わた迄もゑぐり出し
中々改心致すまい
無性矢鱈にひつつかみ
引かきむしるぞ恐ろしき
半死半生の爲体
苦しい〳〵魔我彦よ
アイタタタッタアイタタタ

グヅ〳〵してると飛ばしづく
お前の足元明い内
サア是からが荒料理
大洗濯をしてやらな
ここらが百尋胃袋と
鷲のやうなる爪たてゝ
蝮蛭別は顏しかめ
アイタタタッタウン〳〵〳〵
どうぞ助けてくれぬかい
お寅といふ奴アこれ程に

慳氣の強い女だと　思はなかつたあゝ苦しい
助けてくれゐと聲限り　呼ばはり居たる折もあれ
目かいの見ゐぬ文助が　コレ〳〵申し教祖さん
あなたがお呼びなさつたる　末代日の王天の神
生宮さんが受付に　しびれ切らして待つてゐる
早くお出會なされませ　何だか知らぬがガヤ〳〵と
いと騷がしい音がする　痛い〳〵と仰有るが
頭痛がするのか但し又　お肩がこるのか知らね共
餘り人を待たしては　御無禮になるかも知れませぬ
目かいの見ゐぬ文助は　此場の樣子を露知らず

平氣な事を言うてゐる　お寅はハッと氣がついて
オウ〳〵そうぢやオウそうぢや　末代日の王天の神
此門口に待つてゐる　コリヤ〳〵正宗大廣木
末代樣のお出で故　今日は許しておく程に
モウこれからは馬鹿なこと　したり言ふたり致したら
お前の首はない程に　覺悟はよいかと云ひ乍ら
バッと放せば正宗は　ハッと一息鼻汁をかみ
涙を拭ふ可笑しさよ　お寅は尻目にかけ乍ら
素知らぬ顔をよそほひつ　襟をば直しソロ〳〵と
受付さして出でて行く。

お寅婆アさんの受付へ出た後で、魔我彦は松彦にこんな所を見られては大變だと思ひ、蠑螈別の手を引いて奥の一間へ寢かせて了つた。蠑螈別は夢現になつて、譯の分らぬ事を呶鳴つてゐる。其間にお寅は松彦一行を叮嚀に導き、奥の間へ伴れて來た。

お寅『い、あ、油斷のならぬ惡い猫奴が德利をこかす、盃をふみわる、なんのこつちやいな、エーエ氣のつかぬ、魔我彦さんは何しとるんぢやいな。其間に座敷を片付けてくれるかと思ひ、わザと暇を入れて居つたのに……私がしたのだないから知らぬ……といふ樣な他人行儀の魔我彦の仕方、エーエ仕方のないもんだ』

と小聲で呟いてゐる。

松彦『お寅さん、大變大きな猫がゐると見ゐますなア。盃を踏みわるなんて、隨分立派な者でせう』

魔我彦は次の間からヌッと顏を出した。お寅は目に角を立て、

お寅『コレ、天上さん、氣のつかん方ぢやなア。これ程猫があばれてるのに、なぜ片付けないのだい。お客さんがお出でになつたのに、みつともないぢやないか』

魔我『ハイ實の所は牡猫と牝猫が二疋やつて來やがつて、嚙み合ひをやつたのですよ。牡の方は酒の好きな猫で、へべレケになり、一方はドテライ牝猫で而も寅猫でした滅多矢鱈に咬合ふものだから、火箸でなぐらうと思ふたトタンに、猫はなぐれず盃をなぐつて、此通りメチャ〳〵にして了うたのですよ』

お寅『エーエ、何をさしても氣の利かん方だな、サア、早く片付けなさい、人樣にザマが惡いぢやないかい』

魔我彦は苦笑ひし乍ら、

魔我『ザマの惡い事は誰がしたのだ。ヘン馬鹿らしい』

と口の中で呟き乍ら、不精無精に座敷を片づける。松彦一黨は居間の入口に手持無沙汰な風をして立待ちをして居る。魔我彦はあはたゞしく一間の掃除をなし、火鉢、鐵瓶、德利、膳などの置場所を直し、座蒲團を七枚布き終り、

魔我『サアどうぞお待たせしました。末代日の王天の大神の生宮樣、どうぞ正座にお直り下さいませ』

松彦『天の大神も隨分落ぶれて居りました』

と言ひ乍ら、差圖する儘に正座に坐つた。

お寅『これは〳〵よくマアお出で下さいました。上義姫樣の肉の宮が大變にお待受でムいますよ。神樣だつて夫婦がなければ、誠の御神業は出來ませぬからなア』

松彦『吾々にはそんな粹事はゐりませぬ。お見かけ通りの木石漢ですからなア』

お寅『へ、、、うまい事を仰有いますな。流石姫殺だ。戀の上手はやつれてかゝるとかお寅はッッと傍へ寄り、松彦の手の甲をソッと押へて細目をし乍ら、

言ひましてな。本當に至れり盡せりだ。螺螈別オットドッコイ……大分に違ひますわい。此婆アだつて貴方の樣な男らしい生神樣だつたら、モウ二十年も若かつたら一苦勞して見ますがなア。ホッホ、、、』

松彦は澁をかんだ樣な面付で、

松彦『どうぞ揶揄はやめて下さい。吾々は大切な御用のある身体、其寸暇を伺つてあなたのお勸めに任せ參つたのですから、下らぬ話をなさるのならば、最早お暇を致します』

と箱さしたやうなスタイルでキチンとすわつてゐる。

お寅『これはしたり、誠に失禮なことを申上げました。併しねえ、そう仰有つても、ヤッパリ人間には裏表がありますからなア』

松彦『ハ、ヽ、』

魔我『末代日の王様の生宮様、よくマア御入來下さいました。神政成就の太柱様、どうぞあなたも身魂の因縁だから、他所へは行かずに、神政成就の曉迄、何卒こゝに御逗留を願ひます』

松彦『それは聊か迷惑、半時ばかり御邪魔をいたし、今度は是非共お暇を頂きませう』

魔我『何と仰有つても、身魂の因縁で引寄せられ遊ばしたのだから、そりや駄目でせうマアゆつくりとして下さいませ』

松彦『ハイ有難う』

萬公『モシ義理天上さん、此ブラリ彦は何時歸つたら宜しいかな』

魔我『どうぞ貴方の御隨意になさつて下さいませ。御都合が惡ければ、今直に御歸りになりましても構ひませぬ』

萬公『山竹姫の口から生れた生宮ぢやないが、マン〳〵〳〵ウマ――と呆れざるを得ませぬわい。ヘン』

魔我『お前さんはウラナイ教を研究しましたか。ようそんな細かいことまで御存じですな』

萬公『ハイ此中でウラナイ教通と云つたら、マア私位な者でせう。私はお寅さんの内の入婿でしたからなア。何か因縁があるので、神様が知らして下さいますわ。山竹姫

さんは馬が出來たので、ビックリして今度目に又、天の大神様にお祈り遊ばし、猪を生まれたでせう。それから又次に口から玉を生み出し、其玉がヘグれて孔雀が生れましたでせうがなア。其位なことはチヤーンと此萬公さんは知つてゐるのですからなア」

魔我「成程コリヤ感心だ」

萬公「私の隨意にこれから御暇を致しませうか」

お寅「コレ〳〵萬さん、お前、何時の間にそんなおかげを頂いたのだい。それを聞くからは、歸のうと云つたとて歸なしはせぬぞや。それではヤツパリお前の靈はブラリ彦ではなかつた。耕し大臣の靈かも知れぬぞね。なア魔我彦さん、どうも耕し大臣の樣ですなア」

魔我「メツタにタガヤ……シませんぢやらうかな。私や疑やしませんけれどなア。耕し大臣にしてはチツと輕いやうな氣がしますがなア」

萬公は兩手を組み、目を閉ぎ「ウン」と飛上り、

萬公「コリヤ、魔我彦、其方は耕し大臣の靈を何と心得て居る、そんなことで義理天上日出神の生宮と言へるかア。三千世界の事なら、隅から隅迄、何もかも知つて〳〵知りぬいた此方だぞウ」

魔我「ハイ恐れ入りました」

お寅「これは〳〵萬公、イヤ〳〵耕し大臣の生宮樣、誠にすまぬことを致しました。コレ〳〵お菊、教祖樣がいつも言うて厶つただらう、お前の靈は地上姫だ、地上姫の夫は耕し大臣の生宮と仰有つたぢやないか。サア早うこちらへ來て御挨拶を申上げ

ないか』

と大きな聲で呼ばはつた。お菊は驚いて此場に走り來り、

お菊『お母アさん、耕し大臣の生宮さんて、どなた？　此お方ですか』

と松彦を指さす。萬公は包みきれぬ嬉しさと可笑しさを無理に笑ふまいと氣張つてゐる。成るべくコクメンな素知らぬ体を裝うとしたが、どうしても堪へ切れなくなり、

萬公『バーハッハ、、、』

と吹出した。

お寅『マア〳〵耕し大臣樣の御機嫌のよいこと、ソラそうだろ、永らく地の底へ落ぶれて厶つたのだもの、こゝで肉の宮と肉の宮の御對面を、天晴と現はれてなさつたのだから嘸御滿足で厶いませう。コレお菊、耕し大臣の肉の宮はあの萬公さんだよ』

お菊『エーエ好かんたらしい、あたにイヤだわ。あんな黒い渾しとつた男、それお母アさん、にゐ茶を呑んでこけた時、あれ思ひ出すと、何ぼ耕し大臣さんだつて、愛想がつきますワ』

五三『ウッフ、、、』

アク、タク、テク一度に『ワアハッハ、、、』

アク『何ヒマア都合のよい教だなア。俺も今日からスッパリとウラナイ教へ入れて貰はうか知らんてなア。サア何と言つたらよからうかな。アクビ直し彦でもつまらんし……ウンそうだ、同じアのつく天若彦になつてやらう。ウン〳〵』

ドスン……

『此方は惡にみせて善を働く天若彦であるぞよ』

お寅『オホ、、、』

魔我『アハ、、、』

お寅『おきやんせいなア。そんな受賣をしたつて誰が買うものか。よいかげんに冗談もなさるがよい。惡垂彦命奴が』

アク『あゝあ、こう〳〵尻尾を見られて了つた』

お寅『心得なされや、私の前だからよいが、よそへ行つて、そんな山子をなさると、ドテライ恥をかきますぞや』

五三『ウッフ、、、、こう〳〵惡の企みの現はれ口だ。口は災の門とは能く云つたものだな、無茶苦茶に口をアクとアカンことになるのだ、のうテク、タク、俺たちの面よごしだ』

アク『萬公だつて、そうぢやないか、萬公の言ふことが通用して、俺のいふことが通用せんといふ理窟がどこにあるかい』

五三『アリヤ萬が良いのだ。アハ、、、』

松彦『肝腎の大廣木正宗さんは何處にゐられますか。私は正宗樣に會うてくれと仰有つたので參つたのですが、御本人が居られんとすれば仕方がありませぬ。歸りませうかな』

お寅『ヤ、居られます。併し今御神懸の最中ですから、どうぞ暫く御待ち下さいませ。奥の間にお伺ひの最中でムいます』

松彦『私も何となく氣がせきますから、そんなら私の方から伺ひませう』

とッッと立ち、行かうとする。お寅は醉ひつぶれた蝶蝶別を見られては大變と、兩手

を擴げ、

お寅『マア〳〵、待つて下さい。今貴方に行かれては、一寸都合の惡いことがムいます』

五三『松彦さん、酒に醉うてムるのですよ。受付へ聞こつたでせう、此お寅さんと酒に醉ひ、イチヤ付喧嘩をして、胸倉をとられたり、頭をコッかれたり、助けてくれ……と叫んでゐられたでせう。盃を破つたのも猫ぢやありませぬよ。皆二人の意茶附喧嘩の產物です、シッカリせんとゴマかされて了ひますで』

松彦『アハ、、、、人さんの内のことは言ふものぢやない。沈默しなさい』

と云ひ乍ら再び元の座に着いた。隣の間には蠑螈別が酒に醉ひつぶれ、うつゝになつて囈語を言ひ出した。其聲は次の間へ筒抜けに聞こて來る。

蠑螈『あゝあ、エライことになつたもんだ。つい酒の勢で南瓜みたやうなお寅婆アをなぶつたのが病み付で、こんな目に會はされたのだ。あゝあ之を思へば高姫は親切だ。あゝあ高姫は如何して居るだらうなア。高姫ー々々、會ひたいわいのう。ウニヤ〳〵〳〵ウーン』

お寅の顏色は俄に變つて來た。

魔我『エヘ、、、お寅さん、お氣のもめる事でせうなア』

お寅『アリヤ信者の病人があんなこと言つてるのだよ。こゝへ時々氣のふれた者が參つて來るから……厄介な事だ』

魔我『それでも教祖さんの聲にソックリぢやありませぬか』

お寅『サアそこが氣違だ。惡神が憑つて教祖樣の聲色を使つてるのだ。そんなことが分

らいで、假令看板丈でも、副教祖が勤まりますか。すまないが此お寅は教祖様の……ウンではない……エ、二世の○○だよ。お寅さんを差おいてズケ〳〵と言うもんでない。スッ込んでゐなされや』

魔我『義理天上日出神もお寅さんにかゝつては駄目ですわい』

萬公は長らく手を組んでゐたが、足はしびれ、手はだるくなつて堪に切れなくなりワザとにドスンと飛上り、空呆けた顔をし乍ら、

萬公『あゝ、あゝ、大變な夢を見て居つた。綺麗な別嬪さんと祝言の盃をしたと思へば……何だ夢だつたかいな。オゝ、それ〳〵其お菊とソックリの女だつた。何とマア妙なことがあるものだなア』

お寅『ナアニ、お菊と同じ美人と結婚をしたことが靈眼にうつつたのかな。オゝ、そうだろ〳〵、それで益々確實になつて來た。神様の仰有つたことは違はんワイ……神様有難う厶います、惟神霊幸倍坐世』

と螺螺別の腹立を忘れてお菊の爲に祈つてゐる。

（大正一一、一二、一二、舊一〇、二三、松村眞吹錄）

瑞月

隱身而形も見ゑず聲もなき
眞の神は御中主なり

獨神成而隱身居たる月日神は
國常立と豊雲野神
千萬の神の功績は人草を
神の形に造りたるなり

第二篇　惠

第五章　肱

思はず酒に酔ひつぶれ
つひ脱線の其擧句
高姫戀しい〳〵と
酒つぎ居たるお寅さんは
胸倉とつて抑へつけ
肉の宮をば打ちたゝき
奥の一間に連れ込んで
此場を繕ふ可笑しさよ

鐵（一一九五）

前後も知らず喋り立て
お寅の前でうつかりと
云つた言葉を聞咎め
烈火の如く憤り
前後も知らぬ正宗の
義理天さんの手をかつて
布團の上に寢させおき
末代さんと崇めたる

松彦一行此居間の
眺めて不審の眉ひそめ
魔我彦さんが棕櫚箒木
阿呆待ちし乍らやう〳〵に
隣に聞ゆる呻り聲
高姫殿が戀しいと
夢中になつて呻り居る
面を膨らす折柄に
俄に裝ふ神懸り
一尺ばかりも飛び上り
亂れ果てたる有樣を
其入口に佇みて
持つて掃除の濟む間
一間に入りて座につけば
お寅婆さんはひぐい奴
囈言ばかり並べ立て
お寅は背つり上げて
萬公さんが手を組んで
ウン〳〵〳〵ドス〳〵ン
兩手をキチンと胸に組み

此方は耕し大臣だ
お寅は吃驚仰天し
矢張り耕し大臣か
お菊の婿になるお方
なぞと頻りに手を合せ
ケロリと忘れたあぢけなさ
此場の有樣打眺め
呆れ果てたる折もあれ
これ〳〵もうし義理天上
上義姫さんがお前さんに
潮時狙つて囁けば
萬公さんの肉宮は
そんなら靈の因緣で
あゝ有難い〳〵
蠑螈別の腹立ちを
松彦初め一同は
實に迷信の集團と
一人の娘が現はれて
日出神の生宮さん
俄に用が出來た故

お客様等に失禮して　一寸でよいから來て呉れと
仰有いましたよ逸早く　御いでなされと手を支へ
話せば魔我彦立ち上り　皆さん失禮致します
お寅婆さんやお菊さん　末代様や皆様を
大切にもてなし成されませ　暫くしたら又此處へ
歸つて來ますと云ひ乍ら　使ひの娘と諸共に
離れの館へスタ〳〵と　肩怒らして進み行く。

別の館には松姫の居間があり間は狹けれど三間作り、飾りもなく白木作りで小ザッパリした家である。松姫は千代と云ふ十二三の小娘を小間使として此處に引籠りウラナイ教の實權を握つて居る。表面からは螺螈別が教祖なれど實力は此松姫にあつた。

それ故螺螈別もお寅婆さんも一目を置いて内部では全部其願使に甘んじて居た。無論此松姫はもとウラナイ教の取次で高城山に教主をやつて居た剛の女である。さうして三五教に歸順し玉照彦を奉迎して歸つた殊勳者である。松姫は螺螈別一派がウラナイ教の殘黨を集め小北山に靈場を開き邪教を宣傳しウラル教式を盛に發揮してゐたので言依別命が特に松姫に命じウラナイ教に差遣はし、教理を根本的に改正せしめんとなし給ふたのである。それ故松姫は特別の神力備はり流石の螺螈別も一歩を讓り徒に教祖の虚名に甘んじ、朝から晩まで神のお出入と稱して酒に浸り高姫の行衛を尋ね求めつゝ酒に醉つて悶々の情を消して居たのである。

魔找『上義姫様、今お千代さんを以て私をお呼びなさいましたのは何の御用でムりますか』

松姫『別に折入つて用と云ふ事はありませんが、お前さん、私の事を今日限り云はない様にして貰はないと困りますから、一寸來て貰つたのです』

魔我『私が貴女に對し、何ぞお邪魔になる事を申ましたか』

松姫『貴方いつでも私に向つて、いやらしい事を仰有るじやないか。今日迄一日のばしに色々と云つてお前様の戀の鋭鋒を避けて來ましたが、今日はお前さんに、とつくり云ふておかねばならぬ。今のお客様は松彦様と云ふお方でしようがな、松彦様は誰方の生宮だと思つてゐますか』

魔我『末代日の王天の大神様の生宮じやありませんか』

松姫『さうでせう。さうだから末代様とは何うしても夫婦にならねばならぬ因縁があるので、義理天上さんは私の事を只今限りスツパリと諦めて貰ひ度いのだ』

魔我『昔の神様は末代さんと上義姫さんと夫婦だつたでせう。然し乍ら今日は靈とお成り遊ばし肉の宮が違つて居るのだから貴女と私と夫婦になつた處で滅多に罰は當りますまい。何と仰有つても私は是まで影になり日向になり苦勞をして來たのだから籔から棒をつき出した様に、そんな事を仰有つても仲々承知致しませんぞや』

松姫『これ義理天上さん、影になり日向になり私のために盡したとは、どんな事をして下さつたの。お禮も申さねばなりませんから一寸聞かして下さい』

魔我『義理天上の生宮だけあつて私は義理固いものですよ。お前さんが三五教であり乍ら、うまく化けて這入つてムつたのは百も千も私は承知してゐるのだ。蠑螈別さんも「彼奴あ怪しい、ヒヨッとしたら爆烈彈となつて來たのだらうから酒にでも醉ひ潰して片づけてやらうか」と、お寅婆さんと私と三人の處でソッと相談をなさつた

事がある。それでも此の魔我彦はお前さんが可愛いものだから、何とか云つて助けておけば否應なしにウンと云ふだらうと思つたものだからいろ〳〵と辯解してヤツとの事に蠑螈別やあのえぐいお寅婆さんを納得させ、今ではお前さんがウラナイ教第一の權威者となり、蠑螈別だつてお寅さんだつて貴方を内證で先生と仰ぎ、何事も皆貴女の神勅を受けて處置する樣にならしやつたのも皆魔我彦が斡旋の功でムりますよ。此魔我彦が居なかつたら貴女の生命は、とうの昔になくなつてゐるのだ。さア之でもいやと仰有いますか。松彦樣が成程末代日の王樣でムりませう。然し乍らそれは靈の御夫婦、私と貴女は肉体の夫婦の緣を結んで頂かねば此魔我彦の男が立ちません。さあキッパリと返答を聞かして下さい。返答によつては此魔我彦にも考へがありますから』

松姫『ホ、、、、考へがあるとは如何しやうと云ふの。お前さんに考へがあれば此方にも亦考へがある。サア其考へを聞かして貰ひませう』

魔我彦は言葉につまり

魔我『エ……其考と云ふのは卽ち感慨無量だと云ふのです』

松姫『ホ、、、、感慨無量が如何したと云ふの。可笑しい事を仰有るじや有ませんか』

魔我『こんな問答はぬきにして手取り早く條約成立をさして下さいな』

松姫『何の條約です。治外法權、内地雜居、條約改正、機會均等の流行る世の中窮屈な條約は結び度くはありません。總て國家でも相互の間に危險が迫つた時に條約が成立するものだ。天津條約だとて、華府會議の條約だとて、決して天下太平のために結ばれたのじやありません。貴方と私との間に別に危險の要素が含まれて居るのじ

やなし、何の爲の條約ですか。又其條文の趣は何んな事が問題になつて居りますか。それを聞いた上でなければ、さうやす〳〵と條約諦結批准交換も出來んじやありませんか』

魔我『貴女の仰有る條約の條と私の仰有る情約の情とは情に於て天地霄壤の相違があります。貴女の條はスヂと云ふ字、私の情は青い心と云ふ情ですよ』

松姫『上義姫の上とは違ひますな』

魔我『そりや全然正反對です』

松姫『肝腎の條が正反對なれば條約したつて成立せんじやありませんか。無條件否無情漢だと思はずに、こんな提案は速に撤回して下さい。末代日の王樣が今にお越しになつたら叱られますからな。ホ、、、、、あの末代さんは何うしてムるのだらうエーぢれつたい。好きは來らず嫌は來る、本當に世の中は思ふ樣には行かぬものだわ。これ千代さん、お前御苦勞だが早く末代さんに別館へ來て下さる樣お招き申して來て下さい』

千代『はい、只今行つて參ります』

魔我『これ、お千代さん、一寸待つてくれ、今行つて貰つては大に困る。行つてもいゝ樣になつたら此義理天上さんが指圖をするから』

千代『いゑ〳〵、私は魔我彦さんの召使ひじやありません。上義姫樣の家來ですから貴方の仰有る事は聞く義務はありません。私は御主人樣に全權委員を任されたのですから自分の權利を執行すれば宜いのです。阿呆の天上さん、大きに憚りさん』

と云ひ乍らッ、と立ち上り左の足でボンと疊を脅かしスタ〳〵と表へ出て行かうとす

る。

魔我『こりや〳〵お千代殿、何故長上の云ふ事を聞ませぬか。子供の癖に我の強い』

お千代『師の君の嚴の言葉を如何にして

魔我彦さんにまげらるべしや。

村肝の心も腰も魔我彦が

戀の魔神にとらはれてゐる。

義理天上日出神とはおとましや

赤い顏して焰吹きつゝ』

魔我『こりやお千代、そりや何を吐す。義理天上日出神を何と心得て居るか。世界の根本の根本から何もかも知りぬいた誠一つの大和魂の生粹の生宮さんだぞ』

千代『ホ、、、、不義理の天上、上義姫樣に彈かれて目から火の出の神樣、心も腰も曲つた魔我彦樣、よう、まアそんな馬鹿な事を仰有られたものですわ』

松姫『相生の松の緣も高砂の

幹の根元に荒浪がうつ。

相生の松の緣は千代かけて

榮ゑ〳〵て曲る事なし。

魔我彦が何程日の出の神だとて

此松のみは影もさゝせぬ。

松彦と松姫二人並ばして

松の神世の千代を祝ぐ』

魔我『今日か明日か、何時吉日が來るやと
まつ甲斐もなき魔我彦の胸。
さり乍ら日の出の神の魔我彦は
理を非に曲げても通さなおかぬ。
義理と云ふ事を知るなら上義姫
我心根もちとは汲ませよ』

松姫『山の井の底にも知れぬ水鏡
汲みとり難きふり釣瓶かな』

魔我『ふり釣瓶いかにピン〳〵覆るとも
汲んで見ようぞ天上車井』

松姫『義理天上車に釣瓶はか、るとも
片方は汲めど片方から〳〵。
並べては少しも汲めぬ山の井の
釣瓶を如何に濡らす由なし』

千代『義理天上戀の破れた悲しさに
首をつる瓶とおなり遊ばせ。
ホ、、、、釣瓶おろしにかけられて
沈み給へり戀の深井戸』

魔我『まだ年も行かぬ癖して魔我彦に
何をつる〳〵水臭い事云ふ』

千代『如何しても末代さんの御前に
行かねばならぬ魔我左様なら』
魔我『まて暫し、そんな事なら俺が行く
子供の飛び出す幕でないぞや』
松姫『義理天上日の出の神の生宮に
今日は改め一言申す。
松彦は此松姫がその昔
相知り合ふた珍の戀人。
戀人と聞いて驚き給ふまじ
神の許せし夫婦なりせば』

魔扶『何とまア惡性な事になつて來た
こんな事なら救ふじやなかつたに』
松姫『村肝の心の底ぞ知られける
枉のすくひし魔我彦司を』
魔我彦は双手を組み、
魔我『エーエ、雪隱の火事だ』
松姫『オホ、、、』
千代『イヒ、、、阿呆々々々々』
魔我『エー、コメッチョの癖に八釜しいわい。キ、、、、氣色が惡いわい。サッパリ杓子だ。源助だ、アーア』

（大正一一、一二、一一、舊一〇、二三、北村隆光錄）

瑞　月

月も日も早迫り來て一時も
　貫き刺し成らぬ事となりぬる
夜晝の別ちも知らず神代より
　助けの道にこゝろ碎きつ

第六章　啞

魔我彦の義理天上日の出の神の生宮がお千代に導かれ上義姫の舘へ往つた後には、松彦一行と、お寅婆アさん、お菊の八人が茶を汲み果物なぞを頬張つて道の話に耽つて居る。其所へ受付の文助爺さんが、ノソリ〳〵とやつて來て、

文助『もしお寅さん、お廣前の方から貴女に來て頂き度いと、大變矢釜しう云つて來ました。お客さんの央で濟まないが一寸往つて來て下さいな。私がそれ迄お相手して居ますから』

お寅『又狂人の信者が、暴れ出したのだらう、あゝ仕方がない、一つ鎭めて來てやりませう。末代樣一寸失禮します。落瀧つ彦がその代り話のお相手になりますから』

松彦『御苦勞です、ごうぞゆつくり往つて來て下さい、こゝで私はゆつくりと休まして頂いて居りますから』

萬公『おい五三公、蠑螈別さんは、俺の察する所、酒に喰ひ酔つて奥の間で寢て居るのだよ。それに違ひないわ。そして彼のお寅婆アさんと痴話喧嘩をやつたのだ。キツトそれに極まつて居るよ』

五三『何でも高姫々々と云つて居られたぢやないか。三五教の高姫さんと何か關係があるのだらうかなア』

萬公『何とも知れないなア、併し高姫さんは昔の馴染だと云つて東野別命に一生懸命になり、眼迄釣つて自凝島から遙々磯の舘迄お越になつて居るぢやないか。此處の蠑螈別さんの云ふ高姫は同名異人だらうよ』

五三『さうだらうかな。同じ名も世界には澤山あるから、さうかも知れないなア。併し高と云ふ名のつく女には隨分惚手が多いと見るねゝ』

文助『皆さん、今高姫さんが磯の舘に居らつしやると云はれましたなア、それは本當ですかい』

萬公『ハイ本當ですよ、何でもウラナイ教とかを開いて居た方だと仄に聞きました。隨分口喧しい宣傳使ですよ』

文助『ハテナ、そんなら大方蠑螈別の教祖樣が尋ねて厶る高姫さんかも知れない』

五三『高姫さんと云ふのは黒姫と云ふ弟子があつたやうですよ。そして黒姫には高山彦と云ふ頭の長いハズバンドがあつたと云ふ事です』

文助『それ聞く上は蠑螈別樣の尋ねて厶る高姫さんに違ひない、今磯の舘に居られます

かなア』

五三『ハイ居られます。高姫さんも此處の教主と何か深い靈の因縁があつたのですかなア』

文助『あつたとも〳〵靈の御夫婦だから、どしても高姫樣がムらねば蠑螈別樣の行狀が直らないのだ。蠑螈さんを改心さすのは高姫さんのお役だ、義理天上樣の生宮だ』

五三『へー、魔我彦さんが義理天上日の出神と違ひますかな。そう二人もあつてはどちらが眞か僞か分らんじやありませんか』

文助『實の處は高姫樣の所在が分り、此處へお迎へする迄、一日も無くてはならぬ義理天上さんだから魔我彦さんがそれ迄代理を勤めて ムるのだ。魔我彦さんの本當の靈は道成行成さんぢやぞね』

萬公『何と自由の利く神樣ぢやなア』

蠑螈別は次の間に酒に醉ひ潰れ、お寅に擲られた頭の痛さをこらへ乍ら、高姫の話を耳に入れるや否や、俄に醉もさめ、襖に耳をあて、一言も漏らさじと聞いて居た。

そこへお寅婆アさんがスタ〳〵と歸つて來て、

お寅『皆さん、わらう待たせましたなア』

文助『これお寅さん、お前さん怒つてはいけませんよ。此方々の仰有るには、あの蠑螈別さんの酒の上で仰有る高姫さんが、磯の館に來て居られるそうです』

と小聲で囁いた。お寅は怪訝の顔をして、

お寅『ア、左樣か』

と云ひながら、

お寅『末代様誠にお待たせ致しました、どうぞ、上義姫様に一度會つて下さい。さうすると貴方の靈の因縁性來がすつかり分りますから』

松彦『上義姫とか、松姫とかチョイ〳〵聞きますが、どんな方ですか』

お寅『エ、素々しい、さう照すもんぢやありません。これお菊や、末代様を上義姫のお舘迄御案内申しなさい』

お菊『ハイ、さア末代様、私が御案内致しませう』

松彦『何はともあれ、それではお目にかゝりませう』

と座を立ち往かうとする所へお千代は走り來り、

千代『もし末代様とやら上義姫様が大變お待ち兼ねです。何卒お一人さん入らして下さいませ、折入つてお話し申たいとの事で厶います』

松彦『然らば伺つて見ませう。お寅さん、其外の御一同、一寸失禮致します』

お寅『何卒シッポリと水も漏らさぬ情約締結を遊ばしませ』

と嫌らしく笑ふ。松彦は合點往かぬと思ひながらお千代に導かれ、此場を去つた。

お寅は螺螺別の身を氣遣ひ、そつと襖を引き明けた。見れば螺螺別は襖の際に鉢巻しながら立つて居る。

螺螺『ヤアお寅か、吃驚した』

お寅『それや吃驚なさつたでせう。高姫様の所在を立ち聞きして厶つた處へ、お氣に召さぬお寅婆が突然襖をあけたものですから、御尤もです』

と云ひながら、二の腕を力一ぱい抓つた。螺螺別は

螺螺『エ、馬鹿にすない、いつとても打擲ばかりしよつて、貴様のお蔭で生創の絶えた

間なしだ』

お寅『これ蠑螈別さん、憎くつて一つも抓られませうか』

と云ふて又抓める。

蠑螈『エ、痛い、お客さんがあるぢやないか、見つともない』

と呟く。お寅は狂氣のやうになつて、

お寅『エ、見つともないとは能くも云へたものだ。あんまり馬鹿にしなさるな。この寅だつて馬鹿ぢやありませんよ。些は性根もありますからな』

蠑螈『俺れやもう今日限り此處を出て往く、後は何分賴む』

お寅『エ、何と仰有る、いやな私を振り捨て、夜鷹のやうな高姫の處へ往くのでせう、そんなら往きなさい。お別れに此の通り』

と云ひ乍ら、力一ぱい剛力に任せて鼻をねぢあげた。蠑螈別はフラ〳〵と目が眩み、ドスンと其場に打ち倒れた。

此物音に驚いて、萬公、五三公、アク、テク、タクの五人はバラ〳〵と一室に駈込み、

五三『これ〳〵お婆さん、神樣の道で居ながら何と云ふ手荒い事をするのだ』

お寅『ほんの些細の內證事、さう皆さんに來て貰ふやうな事ではありません。ぞうぞ彼方で、ゆつくりとお茶を上つて下さいませ』

お菊『お母さん、蠑螈別さんは目を眩して居られるぢやありませんか』

アク『何と手荒い婆さんぢやなア』

タク『本當に』

テク『ひどいなア、こんな事思ふと女はもう恐ろしくなつたわ』
五三『オイ萬公さん、隨分お前の義理の親は俠客だけあつて強いものぢやなア』
お寅『ホ、、、、、猪喰つた犬は、どこかに違ふ所がありませうがな。サア彼方へ往きなさい。蠑螈別さんはチョコ〳〵かう云ふ病氣があるのだ。これから私が活を入れて呼び活て上げますから、あまり大勢ドヤ〳〵として居ると靈が中有に迷ふて元の鞘に納まらんと迷惑だから』
萬公『此の場はお寅さんに任して、俺達は次の間でお茶でも頂かうかい』
一同『ウンそんならそうせうかなア』
と次の間に立つて往く。
お寅『オイお菊、お前も小供だてらこんな所にジッとしてゐるものぢやない、蠑螈別さんは私が介抱してあげるから』
お菊『あまり手荒い事はしないやうにして下さいな』
お寅『何うせうと、斯うしようと此方の勝手だ。小供だてら差出口をするものぢやないサア彼方に往きなさい』
お菊『それでも心配でならないわ』
お寅『エ、執こい』
と突き出す、お菊は涙ぐみながら表を差して出て往く。蠑螈別は漸く息を吹き返し、何かハッキリは聞ゐないが、お寅と二人でブツ〳〵と話しをやつて居る。
タク『アク、何とまア、ウラナイ教は手荒い事をする女が居るものぢやなア。バラモン教だつてあんな酷い事は、まだしたのを見た事はないがなア。最前もウラナイ教は

天下泰平上下一致和合の教だ。三五教、ウラル教、バラモン教のやうに喧嘩計りして居る教を信ぜず、ウラナイ教に入れと偉さうに云ひよつたが、薩張、口と行ひとは裏表だ』

テク『それだから世の中に誠の者は目藥程も無いと神様が仰有るのだよ』

タク『本當だねえ』

萬公『上べから見れば尊き神司
其内幕には大蛇住へる』

五三『本當に愛想が盡きたウラナイの
神の道にもやはり裏あり』

アク『あきれたよお寅婆さんの勢ひに
蝶蝶別を捻伏せた所』

タク『それやさうぢや女白浪ばくちうち
夜叉のやうなるお寅婆さんだ』

テク『テク〳〵と強い山道登り來て
思ひも寄らぬ喧嘩見るかな。
あの婆々は唯者ならじと思ふたら
白浪女のなれの果てなる。
あの人がウラナイ教の教祖かと
思へばたまげて物が言はれぬ。
小北山醜の嵐が吹き荒び

丑寅婆さんが荒び狂へる。
ユラリ彦ユラリの姫の祭つたる
小北の山は戀の埃捨て。
埃溜に千歳の鶴の下りたよな
松彦さんのお出ましあはれ。
お寅婆何ぢやかんぢやと口先で
喧嘩見せよと連れて來たのか』
五三『やきもちをやいて俺等に振れ舞ふと
一生懸命にやつて居るのだ。
犬さへも喰はないやうな喧嘩して
見せつけるとはこいつアたまらぬ。
悋氣して死ぬの走るの暇くれと
吐す嬶よりひどい婆うき』
アク『アク迄も戀の意地をば立て通し
小北の山がこはれる迄往く。
あのやうなアク性女に魅られて
蝶螈別も嘸困るだらう』
テク『それやそうぢや丑寅婆さんと云ふぢやないか
悋氣の角をふるは當然。
こいつア又怪体な所へ來たものぢや

往ぬに往なれず居るに居られず。
松彦の司は何して厶るだろ
心許なし小北山風』

斯かる所へ眞青な顏してブラリ〳〵と入つて來たのは魔我彦であつた。

萬公『よう魔我彦さん、些つと顏色が惡いぢやありませんか、何か又ナイスに油を取られたのでせう』

魔我『チョッ、イヤ何でもありません、恐ろしいものでありますわい。本當にチョッ、ふゆたの惡い、もう嫌になつて仕舞つた。エ、もどかしい、焦つたい、胸糞の惡い、チョッしんぐくぐ奴、エ、あかん〳〵、チョッ因緣づくだ。ウンザリして仕舞つた。チョッ、エ、儘よ、おれもチョッもう自暴自棄だ。カ、、、、構うもんかい、チョッ、キ、氣に喰はん、チョッ、ク、、、、糞の餓鬼奴、チョッ、ケ、、、、怪つ體の惡いわ、コ、、、、ころりとやられて來た。チョッ、さらしやがつたな、しんぐくぐ奴、チョッ、好かんたらしい、セ、、、雪隱虫め、チョッ、あ、、そろ〳〵と寢間へでも入つて休まうかな、タ、、忽ちだ、覺られてけつかれチッとは性があるぞ、チョッ、つき出しやがつてテ、てれ臭い、トットとんぼり返りをさせやがつたな、チョッ、ナ、情ない、チョッ、ニ、憎らしい、ヌ、、ヌッと出て來やがつてネ、根つから葉つからのぞみが達しさうにもなしヒドい目に遇はしやがつた。チョッフ、太い事をへい氣でやつてけつかるのだらう、ホ、ほんまに、慾の熊鷹だ。マ、、、またが裂けるぞ、ミ、、見てけつかれ、ム、無茶でも、メ、目をかけた以上は、モ、もう許さんぞ』

五三『これ〳〵魔我彦さん、何獨り言を云つて居るのだ、テンと譯が分らないぢやないか。ヤ、ヤ、こしいイキサツが、ウルサイ程、ユ、湧出して居るのだろ、エ、遠慮なく、五三公さんにヨ、よく知らして呉れラ、らちもない事で無ければ。リ、立派に理由をル、縷述して方をつけたらよいぢやないか。大方レ、戀愛の失策だらう。ロ、ローマンスがあるのぢやないか、ワ、我身の力に合ふ事なら、イ、いかなる事でもウ、受け合ふてエ、緣を結び、オ、納めてやろか、ホ、、、、』

魔我『五三公さん、實の處はバリぢや、バリはバリだが、サツパリだ』

五三『へーン』……一同『ウフ、、、、ワハ、、、、何が何だか譯が分らぬやうになつて來た哩、分からいでも矢張おかしいわい。ウハ、、、、、イヒ、、、』

（大正一一、一二、一一、稿一〇、二三、加藤明子錄）

第七章　相生の松（一一九七）

ウラルの姫の系統と　生れ合ひたる高姫が
バラモン教やウラル教　三五教の御教を
あちら此方と取交ぜて　變性男子の系統と
自稱し乍らフサの國　北山村に居を構へ
蠑螈別や魔我彦や　高山彦や黒姫を
唯一の股肱と頼みつゝ　ウラナイ教の本山を
立てゝ教を四方の國　宣べ傳へつゝ三五の
神の仁慈にほだされて　全く前非を後悔し

神の御爲世の爲に
今は全く三五の
生田の森の神舘
後に殘りし魔我彦は
北山村を後にして
茲に愈ウラナイの
小北の山の神殿と
傳へ居るこそ雄々しけれ
高姫仕込みの雄辯を
彼方此方の愚夫愚婦を
舍身の活動勵みつゝ
教の司と成りすまし
珍の司となりにける。
蠑螈別を教祖とし
坂照山に立こもり
教を再び開設し
稱へて教を近國に
蠑螈別や魔我彦は
縱横無盡にふり廻し
將棋倒しに說きまくり

天下に無比の眞教と
螢の如き光をば
細々乍ら輝かす
黑白も分かぬ世の中は
ねぢけ曲れる教をも
欲にからまれ天國へ
暮さんものと婆嬶が
浮木の村に名も高き
ぎうした機みか何時となく
足しげ〳〵と重なつて
隨喜の涙をこぼさせつ
小北の山の谷間に
さはさり乍ら常暗の
蠑螈別や魔我彦の
正邪を調ぶる智者もなく
昇りて死後を安樂に
愚者々々集まりゐたりけり
白浪女のお寅さん
小北の山に通ひ出し
蠑螈別に殊愛され

女房氣取りで何くれと
注意に注意を加へつゝ
盡して敎祖の歡心を
婆さんはニコ〳〵悅に入り
我双肩に擔ふたる
蠑螈別は曲神に
夜と晝との區別なく
慰め居れど時々に
飛出し來り高姫の
お寅の心を痛めたる

一切萬事身のまはり
あらん限りの親切を
やつと求めて丑寅の
小北の山を一身に
やうな心地で控ゐる。
魂をぬかれて酒計り
あふりて心の煩悶を
心に潜みし曲鬼が
色香を慕ひ口走り
其醜態は幾度か

數へ盡せぬ計り也
勘忍袋をキッと締め
大洪水の襲來し
決潰したる計りにて
人目もかまはず前後をも
つかみ締めたる恐ろしさ
表に待ちし松彦の
心を痛めいろ〳〵と
隱し終うせぬ爛德利
金切聲は屋外に

お寅は無念を抑へつゝ
こばり詰めてゐたりしが
千里の堤防一時に
悋氣の濁水氾濫し
忘れて敎祖の胸倉を
かゝる亂痴氣騷ぎをば
司の一行に隱さんと
此場の体裁つくろへど
土瓶の居ずまひわれた猪口
聞ゐ來るぞ是非なけれ

お寅婆さんが此山に
これ丈怒つた大喧嘩
如何した拍子の瓢簞か
珍客さんの目の前に
云ふもなか〳〵愚なり
御靈幸ひましませよ。

小北の山の別舘に
掌握しつゝ朝夕に
大御心を奉戴し

○

潜みて教の實權を
神素盞嗚大神の
ウラナイ教の曲神を

來つて御用を始めてゆ
未だ一度もなかつたに
思ひもよらぬ醜狀を
曝露したるぞ神罰と
あゝ惟神〳〵々

日日萬に言向けて
蠑螈別や魔我彦の
三五教の眞髓を
世人の爲に神德を
蠑螈別の言ふまゝに
心ならずも春陽の
神に祈りて松姫が
小北の山に祀りたる
末代日の王天の神
何れも正しきものならず

根本的に改良し
身魂を立替立直し
理解せしめて道の爲
輝かさんと松姫は
上義の姫と稱へられ
花咲き匂ふ時節をば
心の奥ぞ床しけれ
ユラリの彦の又の御名
其外百の神名は
狐狸の神靈に

詐されて魔我彦が
得意になりて宮柱
へグレ神社を立て並べ
三五教の松姫も
信仰するよな者でない
いと嚴格な審神をば
其外百の神司
怒り狂ひて松姫の
悟りたるより松姫は
ウラナイ教の實權を
誠の神と思ひつめ
へグレのへグレのへグレムシヤ
迷ひゐるこそうたてけれ
かやうな事に騙れて
さは去り乍ら今すぐに
なすに於ては蟒蟒別
一度に鼎の湧く如く
身邊忽ち危しと
素知らぬ顔を裝ひつ
何時の間にかは掌握し

小北の山の神殿は
指命の下に大部分
モウ此上は松姫も
やがてポツ〳〵正体を
昔別れし我夫の
神の司となりすまし
お寅婆さんに導かれ
居間の窓より覗きこみ
俄に戀しさ身にせまり
神勅なりと言ひくろめ
殆ど松姫一人の
動かし得べき身となりぬ
何の遠慮も要るものか
現はしくれんと思ふ内
松彦さんが三五の
思ひも寄らぬ此山に
登り來りし其姿
ハッと胸をば躍らせつ
たまりかねてぞなりければ
お寅婆さんを招きよせ

今來た人はユラリ彦
尊き神の生宮ぞ
五六七神政成就の
御苦勞乍ら一走り
末代さんを是非一度
いと慇懃に遇して
鎭座まし〳〵ウラナイの
立たさにやならぬお寅さん
お前はこれから此山の
おだてあぐればお寅さん
末代日の王天の神
あの神樣に歸なれては
仕組はとても立たうまい
お前は後を追つかけて
これの舘に連れ歸り
いつ〳〵迄も此山に
神の敎の目的を
これの使命を果しなば
最大一の殊勳者と
俄に元氣を放り出して

十曜の紋の描きたる
松姫舘を飛出して
呼戻したる其手腕
あゝ惟神〳〵々
蠑螈別の片腕と
許す魔我彦副敎主
一から十迄鵜呑みして
只有難い〳〵
廣い世界にやあるまいと
眞理を案す敎とは
扇片手にひつゝかみ
オーイ〳〵と松彦を
なみ〳〵ならぬ婆さん也
御靈幸ひましませよ」
自分も許し人も亦
蠑螈別の託宣を
善惡正邪の區別なく
誠の神は此外に
心の底から歡喜して
少しも知らず朝夕に

骨身を惜まず神前に
迷い切つたる魔我彦は
善惡正邪に係はらず
迷信せるこそ愚なれ
朴直一途な魔我彦も
戀に心を亂しつゝ
甲に致そか乙にせうか
なぞと集まる信者をば
物色しつゝ目が細い
鼻は高いが目が細い

いとまめやかに仕へつゝ
蠑螈別のなす事は
何れも神の正業と
かくも敎に迷信な
若き男の選にもれず
我れにかしづく女房は
又々丙か丁戊か
女と見れば探索し
色は白いが鼻低い
背丈が高い低いなど

朝な夕なに首かたげ
心を惱ましゐたる折
花を欺く松姫が
二世の女房は松姫と
神の奉仕の其間は
松姫さんの歡心を
吉日良辰到來し
合衾式をあげんぞと
思ひもよらぬ松彦が
ウラナイ敎の信徒が

妻の選擧に餘念なく
少しく年はよつたれど
これの館に來りしゆ
自分免許の妻さだめ
萬事萬端氣を付けて
買ふ事計りに身を俏し
連理の袖を飜し
樂みゐたるも水の泡
此神館に現はれて
唯一の主神と賴みたる

神徳高きユラリ彦
末代日の王天の神
突然こゝに天降り
靈の夫婦と聞きしより
胸を躍らせゐたりける
侍女のお千代が現はれて
あが師の君が御用ぞと
鼻うごめかし肘を張り
豈計らんや松姫は
犯し難くぞ見ゐにける

又の御名を尋ぬれば
珍の宮居とあらはれて
上義の姫の松姫が
氣が氣でならぬ魔我彦は
かゝる所へ松姫の
魔我彦さんへ上義姫
聞いたを機に座を立つて
吉報聞かんと行てみれば
打つて變つた其樣子
義理天上と自稱する

魔我彦、姫に打向ひ
述べんとすれば松姫は
魔我彦さんへ今日からは
松彦さんは我夫
目付をしたりバカな事
二世の夫のある私
松彦さんはユラリ彦
私は妻の上義姫
切るに切られぬ因縁で
世界隈なく追よひて

思ひの丈をクド〳〵と
挺でも動かぬ勢で
お前に賴む事がある
モウ之からは厭らしい
言はない樣にしておくれ
大に迷惑致します
末代日の王天の神
遠き神世の昔から
ヘグレのヘグレのヘグレ武者
おちて居つたが優曇華の

花咲く春に相生の
千代の契を結び昆布
至清至潔の身の上だ
せない二人の神司
生れた人は何よりも
戀の執着サッパリと
不意に打出す肱鐵砲
言葉を盡し最善を
お千代に迄も馬鹿にされ
松彦司を恨みつゝ

松と松との深緣
お前と私との其仲は
汚しもなさず汚されも
萬の物の靈長と
斷の一字が大切よ
放かしてお呉れと手嚴しく
呆れて言葉もないじやくり
盡せど松姫承知せず
無念の涙ハラ〳〵と
シオ〳〵立つて元の座へ

顏の色まで靑くして
五三公其他の連中が
魔我彦さんは腹を立て
怒りもならず泣けもせず
俯むきゐるぞ憐れなる。
松彦さんは別館
日頃慕ひし松姫が
笑顏を湛へて松彦が
流石の松彦呆然と
面を眺めてゐたりしが

歸つて見れば萬公や
力限りに嘲笑する
齒ぎしりすれど人の前
煩悶苦惱の胸おさへ
少女の千代に導かれ
進みて見れば此はいかに
盛裝凝らしニコ〳〵と
手をとり奥へよび入れる
言葉も出でず松姫が
あたり見まはし松姫は

ソッと其手を握りしめ
夜の嵐に誘はれて
餘りの月日を送りました
思ひ出しては泣くらし
月日の駒の關もなく
行方を尋ね神様に
早く會はさせ玉へやと
現はれ玉ひし神の德
何から言うてよかろやら
其糸口も亂れ果て

戀しき我夫松彦よ
別れてから早十年
雨の晨や風の宵
思ひ出しては又歎く
今日が日迄も我夫の
祈りを上げて一日も
祈りし甲斐もあり〳〵と
今日の集ひの有難さ
話は海山積れ共
解きかねたる胸の内

推量なされて下さんせ
私も嬉しいお目出たい
ごうぞ喜んで下さんせ
其手をしかと握りしめ
ヨウまあ無事でゐてくれた
世を果敢なみてウロ〳〵と
巡り〳〵て月の國
現はれ玉ふ神柱
ランチ將軍片彦が
神の柱や軍人

マア〳〵無事で御達者で
貴方に見せたい者がある
語れば松彦涙ぐみ
お前は我妻松姫か
お前に別れた其後は
フサの國をば遠近と
バラモン教の本山に
大黒主の部下とます
司の神に見出され
二つを兼ねてまめやかに

仕へ乍らも兩親や
思ひ案じて一日も
時も涙にかきくれて
尊き神の引合せ
戀しき兄に巡り會ひ
三五敎に入信し
野中の森で夜をあかし
お寅婆さんの母と子に
緣の綱に曳かされて
日頃慕ひし我妻は
兄の身の上汝が身を
安く此世を渡りたる
悲しき月日を送る折
河鹿峠の谷間で
茲に心を飛ばし
御伴に仕へまつりつゝ
橋の袂に來て見れば
思はず知らず出會はし
思はず知らず來て見れば
こゝに居たのか嬉しやな

結ぶの神の結びたる
二人の仲は一旦は
右に左に別る共
心に解ぬ戀の糸
解き初めたる今日の空
嬉しさ胸に滿ち溢れ
答ふる言葉もないじやくり
神の惠を今更に
思ひ浮べて有難く
身に泌みわたる尊さよ
旭は照る共曇る共
月は盈つ共虧くる共
假令大地は沈む共
誠の力は世を救ふ
眞心こめてひたすらに
神の敎を守りたる
二人の身をば憐れみて
思ひもよらぬ此山で
會はし玉ひし天地の
神の御前に感謝して

此行先は殊更に　命を惜まず道の爲
心の限り身の限り　仕へまつりて神恩の
萬分一に報うべし　あゝ惟神々々
御靈幸ひましませよ。

松彦『尊き神樣の御恵みに依つて、永らくの間、互に在所の分らなかつた松と松との夫婦が、思はぬ此山で廻り合ふとは、何たる有難い事であらう。先づ其方も無事で、松彦も嬉しい、就ては私に見せたい者があると云つたのはどんな者だ、樣子有りげなお前の言葉、グッと胸にこたへた』

松姫『ソリヤそうでムいませう。貴方にお別れした時に、私は身重になつて居つた事を覺にてゐらつしやるでせう』

松彦『確に覺にてゐる。機嫌よく身二つになつただらうなア』

松姫『ハイ、アーメニヤを逃げ出す途中、フサの國のライオン河の畔で腹が痛くなり、とう〳〵姙娠八ケ月で、何愛い女の子を生みおとしました』

松彦『そして其子は何うなつたのだ。早く聞かしてくれ』

松姫『途中の事とて如何する事も出來ず。苦んで居る所へ、酒に酔ふた男がブラリ〳〵と通り合せ、親切に我家へつれ歸り、介抱をしてくれました。それが爲に母子共に機嫌よく肥立ち、娘は其男に子がないのを幸ひ、貰つて貰ひ、私はフサの國北山村のウラナイ教へ信仰を致し、遂には抜擢されて宣傳使となり、自凝島の高城山に教主となつて、御用を致して居りましたが、高姫樣の三五教へ歸順と共に私も三五教へ歸順致し、言依別命樣の内命に依つて、小北山へいろ〳〵と言を設け、うまく

入り込んで、神業の爲に、心を碎いて居ります。そして其娘はこゝに居る此お千代でムいます』

松彦『ヤアこれが我娘か、ヨウまア大きくなつてくれた。親はなうても子は育つとは能く云つたものだな。コレお千代、私はお前の父親ぢや、養育を人手に渡して濟まん事だつたなア』

と涙ぐむ。お千代は始めて松姫の物語を聞き、松姫は自分の實の母で、松彦は實の父なることを悟つた。お千代は思はず嬉し涙にくれてワッと其場に泣倒れた。松姫も涙乍らにお千代を抱起し、頭を撫で背を撫でゝ齒をくひしめて忍び泣きしてゐる。

松彦『たらちねの親はなくても子は育つ
育ての親の惠み尊き。

吾子をば育て玉ひし二親は
いづくの人か聞かまほしさよ』

松姫『フサの國竹野の村のカーチンと
言つて名高き白浪男。
さり乍らカーチンさんの夫婦づれ
今はあの世の人となりぬる』

松彦『一言のいやひ言葉もかはされぬ
育ての親の有難き哉。
吾娘、千代も八千代もカーチンの
育ての恩を忘れまいぞや』

千代『有難き育ての親に悲しくも
　別れて誠の親に會ひぬる。
たらちねの父と母とに巡り合ひ
　嬉し涙の止めどなくふる』

松姫『母よ子よと名乗らんものと思ひしが
　あたり憚り包み居たりし。
吾母と知らずに仕へ侍りたる
　お千代の心いとしかりけり』

千代『吾母と知らず〳〵に懐しく
　師の君様と思ひ仕へぬ。

どことなく温みのゐます師の君と
　朝な夕なに伏拜みける』

松彦『三五の神の大道に入りしより
　三日ならずに妻にあひぬる。
妻となり夫となるも天地の
　神の御水火のこもるまに〳〵。
天地の神の御水火に生れたる
　吾子は千代に榮に行くらむ』

千代『父母の恵のたまくら知らね共
　何とはなしに慕ひぬる哉。

カーチンの父の命を生みの親と
　慕ひて朝夕仕へ來にけり。
朝夕になでさすりつゝ吾身をば
　育て玉ひし親ぞ戀しき』

松彦『さもあらん、藁の上から育てられ
　慈悲の温みに生ひ立ちし身は。
われよりも育ての親を尊みて
　とひ弔ひを忘れざらまし』

松姫『戀したふ、あが春の君に巡り會ひ
　嬉し涙のとめどなき哉』

かく親子は歌を以て心の丈を述べてゐる。館の外面より俄に聞ゆる瓦をぶちやけた樣な聲、

『グワハッ、、、、イッヒ、、、、』

親子三人は此聲に驚き、あたりをキョロ〳〵と見廻した。怪しき笑ひ聲はそれつきりにて屋上を吹き亘る風の音ゾウ〳〵と聞にてゐる。此聲の主は魔我彦であつた事は前後の事情より伺ふ事が出來る。

（大正一一、一二、一二、舊一〇、二四、松村眞澄錄）

第八章　小蝶（一一九八）

松彦松姫兩人は
千代子と共に歌垣に
語らひ居たる折もあれ
瓦をぶちあけた其如く
聞こ來れる其音色
いとも不穩に聞こけり
引開け外を眺むれば
兩手で耳を抑へつゝ

いとし盛りの我娘
たちて心の誠をば
突然起る笑ひ聲
ガラ〳〵といやらしく
嫉妬嘲笑交り來て
娘のお千代は門口を
豈圖らんや魔我彦が
腰をくの字に曲げ乍ら

差足抜足逃げて行く
やさしき聲をふり絞り
ホ、、、、と笑ひ出す
後ふり返る魔我彦は
はぢけた樣な目を剝いて
イヒ、、、、イヒ、、、
しつぽり泣いたがよからうぞ
お寅婆さんの前に出て
二人の戀を何處までも
覺にてゐよと云ひ乍ら

お千代は後を顧みて
紅葉の樣な手をふつて
お千代の聲に驚いて
眞赤な顏に團栗の
舌を嚙み出し腮しやくり
勝手な熱を吹きよつて
之から俺は蝶蝶別
一伍一什を物語り
妨害せなくちやおかないぞ
お千代を睨めつけスタ〳〵と

館をさして歸り行く
ホ、、、、魔我彦が
今は敢なく破れけり
立派な夫のある人を
女房にしやうとは何の事
枉の憑つた魔我彦は
善惡邪正の大道を
父と母とは昔から
誰に憚る事あろか
何程なりとも誹れかし
お千代は又もや打笑ひ
曲つた心の戀衣
破れかぶれの負惜み
神の敎にあり乍ら
横戀慕も程がある
戀に眼を晦ませて
踏み外したる淺間しさ
天下晴れての夫婦仲
笑へば笑へ誹るなら
私と云ふものある上は

假令蠑螈別さんが
ウラナイ敎のお道から
末代日の王天の神
誠の道から云ふたなら
ウラナイ敎の道として
つけて喜んで居る上は
ユラリの彦となりすまし
神と神との夫婦じやと
蠑螈別もお寅さんも
何程魔我さんがゴテ〳〵と
何と云はうとも構やせぬ
云ふても父はユラリ彦
母の命は上義姫
戯けた話であるけれど
何とかかんとか神の名を
假令松彦父上が
母の命は上義姫
云つた處で何惡い
とつくに承知の上じやないか
曲つて來やうが矢も楯も

二人の仲にたつものか
父と母との久方の
立聞きなして妬け起し
外聞の惡い門口で
一丈二尺の褌をば
耻を知らぬも程がある
蠑螈別の片腕と
佛壇の底めげじやないけれど　阿彌陀が零れて來るじやないか
オホ、、、、オホ、、、
何と譬へて宜からうか　魔我彦さんのスタイルは
溝に落ちたる瘦鼠

ホ、、、、あた可笑しい
睦言葉を外面から
悋氣の焰に包まれて
カ、、、カッと笑ひ出す
締めた男のすることか
こんなお方が副教主
なつてゐると思ふたら

雪隱に落ちた鷄が　尾羽打枯らし腰曲げて
犬の遠吠に卑怯にも　笑つて逃げ行く淺間しさ
オットドッコイ惟神　神のお道にあり乍ら
腹立ち紛れに魔我彦の　知らず〳〵に惡口を
子供の身として述べ立てた　此世を造りし神直日
心も廣き大直日　道理を知らぬ年若の
娘の云つた世迷言　直日に見直し聞直し
惡言暴語の罪科を　何卒お許し下さんせ
父と母との身の上を　思ひにあまつて思はざる
脫線振りを發揮した　乙女心を憐れみて

許させ給へ三五の
慎み敬ひ詫奉る』

皇大神の御前に

松彦『千代子は外へ出たきり、何だか謠つてゐる樣だな。迂潤した事を云つて魔我彦さんの機嫌を損つてはならないがな』

松姫『お千代は何分有名な俠客に育てられ、小さい時からスレッからしに育て上げられたものだから、肝玉も太く、年に似合はぬ早熟くさりで隨分偉い事を云ひますよ。時々脫線振りをやつて蠑螈別さんや魔我彦さんにアフンとさせ、ヤンチャ娘の名を擅にして居ります。それ故私も名乘つてやり度かつたなれど、故意とに隱して居りました』

松彦『お千代には如何云ふ機でお前は會ふたのだ』

松姫『あのお寅さんが連れて來たのですよ。同じ俠客同志で心安かつたと見られて、親も兄弟もない娘だから、ここで立派に育て上げ度いと云つて親切に連れて來たのですそれから私が樣子を考へて居れば全く私の娘と云ふ事が分り、矢も楯も堪らず嬉しうなつて來ましたが、今名乘つては、あの子の爲めによくないと思ひ、今日が日までも隱して居りました。本當に子供と云ふものは敎育が大切ですな。親のない子が泥棒になつたり、大惡人になるのは世間に澤山ある習ひですから、これから十分に氣をつけて敎育をしてやらねばなりますまい。十二や三で婆の云ふ樣な事云ふのですから困つて了ひますわ』

松彦『さうだな。子供は敎育が肝腎だ。子供と云ふものは模倣性を持つてゐるから見聞した事を自分が直に實行したがるものだ。子供は親の眞似をして遊びたがるものな

り、大人は亦白い石や黒い石を並べて子供の眞似をしたがるものだ。これもヤッパリ因碁だらうよ。アハ、、、、』

松姫『私だつて、貴郎だつて今こそ神樣のお道に仕へて人に崇められて先生顔をして居りますが、あの子の出來た時分は隨分なつて居ませんでしたな。あの時の魂で宿つた子だもの、碌な子が生れさうな事がありませんわ。まだまア不具に生れて來なんだのが神樣のお恵みですよ』

松彦『然しお千代は何時迄も外に立つて魔我彦だとか、何とか謠つてるじやないか。困つたものだな。ぢれお千代を呼んで來う』

と云ひ乍ら松彦は立つて門口の戸を開き外を覗き込んだ。お千代はイーン〳〵をしたり、目を剝いたり拳骨を固めて何だか人の頭でも毆る樣な眞似して、空中を毆つてゐる。

松彦『これ〳〵お千代、お前、そりや何をして居るのだい』

千代『はい、これは〳〵末代日の王天の大神樣、上義姫との御再會を祝するためきつく姫が岩戸の外で神樂を奏げて居りますのよ。何ほ娘だつて御夫婦の久し振りの御對面にお邪魔になつては、ならないと氣を利かして居りますのよ。今の中にお母アさんと、とつくり泣いたり笑ふたり、力一杯お芝居を成さいませ。お父さんやお母さんのお樂しみのお邪魔になつてはなりませんからな』

松彦『何と呆れたお轉婆だなア。これ、千代さん、そんな掛酌は要らない。とつとと入つておいで』

千代『もう暫らくここで遊ばして下さいな』

松彦『遊ぶのはいゝが魔我彦が何うだの、斯うだのと憎まれ口を叩いちやいけないよ』

千代『だつてお父さん魔我彦さんは仕方のない男だもの。チッと位恥をかゝしてやらねば後の爲めになりませんわ。男の癖に間がな隙がな、お母アさんの居間へやつて來て味噌ばつかり摺るのですもの。好かんたらしい。あたい腹が立つて堪らんのよ。今日まで辛抱して居つたのだけれど、お父さんとお母さんが分つたからは、もう大丈夫魔我彦位が何ほ束でやつて來ても大丈夫ですわ。親の光は七里光ると云ふじやありませんか。永い間親なしじや〳〵と云つて輕蔑され、悔し殘念を今まで耐つて居つたのですよ。其中でも魔我が一番私を輕蔑したの。さうだから日頃の鬱憤が破裂して一人口から惡罵が破裂するのですもの。チッとは云はして下さいな。まだこれ位云つた處で三番叟ですわ』

松彦『お前の心になれば無理も無からうが、そこを辛抱するのが神樣の道だ。さうズケ〳〵と云ひ度い事を云つて人に憎まれるものでない。子供は子供の樣にして居ればいゝのだよ』

千代『魔我彦に憎まれたつて構はんじやありませんか。お父さんとお母さんに可愛がつて貰ひさへすれば宜しいわ、ねゝ』

松彦『兎も角お母さんが待つてゐるからお這入りなさい』

お千代はニコ〳〵として松彦の後に從ひ這入つて來た。

松彦『お千代は隨分スレッからしになつたものだ。困つた事だな』

松姫『本當に困りますよ。これが私の娘だと大きな聲では云はれないのですもの。本當に困つちまいます。こんな子が成人したら又博奕打ちの親方にでもなりやせまいか

と思へば末が恐ろしうムいますわ』

千代『お母さん、私俠客になるつもりなのよ。弱きを助け、强きを挫き、大きな荒男を顧で使ひ女王氣取りになり、姐貴〳〵と稱へられて名を遠近に轟かすのが人生第一の望ですわ。お寅婆アさんを見なさい。俠客だつたお蔭で蝶蝶別さんのお氣に入りになつて居らつしやるじやありませんか』

松姫『これお千代、お前はお寅婆アさんの樣になりたいのかい』

千代『あたい、お寅婆アさんの樣な中途半の女俠客は嫌ひよ。波斯の國、月の國きつての大親分にならうと思つてゐるの』

松彦『困つたな、偉いものを生んだものだ。やつぱり種子は爭はれぬものかいな』

千代『ホ、、、、茄子の種子は茄子、瓜の種子を蒔けば瓜の苗が生ります。私はお父さん、お母さんのヤンチヤ身魂から此世に生れ、其上俠客の手に育てられたものだもの、斯んな心になるのは當然ですわ』

松彦『お前は神樣の宣傳使になるのが宜いか、俠客になるのが宜いか』

千代『神樣の宣傳使なんて氣が利かんじやありませんか。譯の分らぬ婆嬶や時代遲れの老爺さんや、剛慾の人間や、盲や啞に、不具に病身者、一人だつて滿足のものが神樣の處へ寄つて來ますか。たま〳〵體の丈夫な男女が來たと思へば精神上に欠陷のある人間ばつかり、そんな人に崇められたとて何が面白うムりませう。理解の上に崇められたのなら愉快ですが、無理解者から持て囃されたつて何が光榮ですか。本當に馬鹿らしく消ゑ度くなつて了ひますわ。それよりも俠客になつて御覽なさい。裸百貫の荒男、靈肉ともに欠陷のない、男の中の男が集まつて來て義に勇み、誠を

立て、惡人を懲し、まるで神樣の樣な慾のない、宵越しの錢を使はぬ綺麗薩張りした人間ばかりに姐貴々々とたてられて、此世を送るほど愉快な事がありますか。あたいは何處迄も女俠客になるのが望みです』

松彦『ハ、、、、困つたな。親は宣傳使、子は女俠客、どうも反が合はぬ樣だ』

千代『お父さん、大工の子は大工を營み、醫者の子は何處迄も醫者をやらねばならぬと云ふ規則はありますまい。各自に人間には、それ相應の天才があつて凡ての事業に適不適があるものです。自分の天才を十二分に發揮するのが敎育の精神でせう。壓迫敎育を施して兒童の本能を傷け、枅できり揃へた樣な團栗の背競べの樣な人間ばかり作り上げる樣な現在の敎育では大人物は出來ませんぜ。植物だつて、枝を曲げたり、切つたり、針金で括つたり、いろ〳〵と干涉敎育を施すと、床の間の置物よりなりますまい。山の谷で自由自在に成育した樹木は成人して立派な柱になりませう。さうだから人間は如何しても天才を完全に發揮させる樣に敎育させなくては駄目ですわ』

松彦『松姫、お前の云つた通り、何こまアこましやくれた娘だな。隨分社會敎育を受けたと見ゐるな』

松姫『到底私の手には合はない娘ですよ』

松彦『さうだな。いや却て干涉せない方がよいかも知れない。一六ものだ。大變な善人になるか、惡人になるか、先を見て居らねば分るまい。到底親の力では駄目だ。神樣にお任せするが一等だ』

千代『それが所謂惟神敎育ですよ。貴方だつて、いつも惟神々々と仰有るのですも

の』

松彦『アハ、、、、』

松姫『オホ、、、、』

千代『惟神神に任せば自ら
松の緑は千代に榮行く。
相生の松の下露日を受けて
生ゐ出でにけり味良き茸』

（大正一一・一二・一二・舊・〇・二四、　村隆光錄）

第九章　賞詞（一一九九）

蛇は寸にして人を呑み、旃檀は嫩芽より香ばしとは宜なるかな。

十二の冬を迎へたる　俠客育ちの乙女子は
修學院の小雀が　千代々々囀る蒙求の
聞き覺ゑたる白浪言葉　今は包んで云はねども
ここはなしに小まじやくれ　此世の風にもまれたる
老人さへも舌を卷く　水も漏らさぬ言葉つき
末頼もしく又恐ろしく　はかりかねてぞ見ゐにける
入尋の殿に詣でんと　お千代は父母の許し得て

ニコ〳〵しながら階段を
後見送りて松彦は
松彦『末恐ろしき我娘
體は生みつけたればとて
力に生れしものでなし
御息をかためて人となり
神のまに〳〵成人し
向ふ處に進ましめ
性にも合はぬ世の中の
柱になさんと焦るとも
氣もいそ〳〵と下りゆく。
妻松姫に打ち向ひ
如何なるものとなるぢややら
魂計りは人の身の
皆天地の神様の
此世に生れて來し上は
思ひの儘に魂の
打ち遺りおくに如くはなし
業を習はせ麗しき
魂計りは人の身の
左右し得べき事ならず
御靈幸倍ましまして
厚く守らせ給ひつゝ
太しき功績を現はして
光ともなり塩となり
神のみのりをたわ〳〵に
三五教を守ります
夫婦二人が謹んで
朝日は照るとも曇るとも
假令大地は沈むとも

あゝ惟神々〳〵
お千代の體靈をば
神の御爲め世のために
此世の中の熱となり
花ともなりて世を救ふ
結ばせたまへ惟神
皇大神の御前に
畏み〳〵願ぎまつる
月は盈つとも虧くるとも
三千世界の世の中に

子に勝りたる實なし
行末思ひ煩うは
あゝ松姫よ〳〵
神の御言を畏みて
案じ煩う事もなく
夫婦の息を合せつゝ
心の限り身の極み
此世の花と謳はれて
名を萬世に照らすべし
親子夫婦の廻り會ひ
況してや愛しき一人子の
親の身として當然よ
汝と我とはひたすらに
我子の事に心をば
神の御前に打ちまかせ
世人を救ひ守るべく
誠一つを立て通し
神の御名を世に照らし
思へば〳〵有り難や
小北の山に曲神が

住まふと聞きて來て見れば
善惡不二の世の樣を
醜神達に囚はれし
神の御目に見たまへば
愛憎の區別あるべきや
惡みつ審判きつ惡態に
尊き神の御心を
いざこれからは我々は
魔我彦さんやお寅さん
天地の道理を說き明し
思ひも寄らぬ今日の首尾
今更思ひ悟りける
蠑螈別や魔我彦も
我等も同じ神の御子
人の身として同胞を
罵り合ふは天界の
惱ましまつる醜業ぞ
蠑螈別の神柱
其外百の司等に
言葉を盡し身を盡し